三重県埋蔵文化財調査報告 205

北蟻越遺跡(第１次)
津　賀　２　号　墳

2000・3

三重県埋蔵文化財センター

赤色顔料貯蔵壷出土状況

赤色顔料（ベンガラ）及び壷

序

鈴鹿市は古くから近畿地方と東海地方を結ぶ交通の要衝として栄えてきた所であります。また、古代には伊勢国府や伊勢国分寺などが築かれ、伊勢国の中心地であった所でもあります。この度調査を行った北蟻越遺跡・津賀２号墳は、伊勢国府跡として知られる長者屋敷遺跡の東１㎞に所在する遺跡であり、国府が築かれる以前のこの辺りの歴史を知る上で重要な遺跡であります。

こうした埋蔵文化財は、祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちの責務としてこれを積極的に保護し後世に伝えていくとともに、更なる文化の向上のための礎とすべきものであります。しかし一方では、わたしたちの生活を豊かなものとするため、各種の公共事業も必要となってまいります。この度は、そのような公共事業に伴って現状を保存することが極めて困難であると考えられるため、発掘調査を実施して記録での保存を図ったところであります。

ここに報告いたしますのは、平成10年度一般地方道辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業に伴って発掘調査を実施したものであります。この発掘調査の成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた三重県県土整備部の各関係機関の方々、また、現地での調査にあたってご助力をいただいた鈴鹿市教育委員会をはじめ、地元の方々には、ここに心からのお礼を申し上げます。

2000年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　大　井　與　生

例　　言

1　本書は三重県鈴鹿市津賀町南山に所在する北蟻越遺跡（第１次)、津賀２号墳の発掘調査報告書である。

2　調査は平成 10 年度一般地方道辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業に伴い、緊急調査を実施したものである。

3　調査費用は県土整備部が全額負担した。

4　調査体制は以下の通りである。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

主　　事　城　吉基

技　　師　新名　強

5　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。また、本書の執筆・編集については調査担当者が行い、目次及び文末に執筆者名を記した。

6　調査地は国土座標Ⅵ系に属する。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁北方位は西偏６°40′（平成10 年）である。

7　当報告書での遺構は、掘立柱建物を除き通番としている。また、番号の前には以下の略記号を用いている。

ＳＢ…掘立柱建物　　ＳＨ…竪穴住居　　ＳＤ…溝

ＳＫ…土坑　　pit…ピット、柱穴

8　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 ……（城）1
1．調査の契機 ……1
2．調査の経過 ……1
3．調査の方法 ……2
Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（城）3
Ⅲ　北蟻越遺跡（第１次）の調査成果 ……（城）4
【Ａ地区】
1．地形および基本層序 ……4
2．遺構 ……4
3．遺物 ……11
【Ｂ地区】
1．地形および基本層序 ……15
2．遺構 ……15
Ⅳ　津賀２号墳の調査成果 ……（新名）16
1．調査以前の状況 ……16
2．遺構 ……16
3．遺物 ……20
Ⅴ　北蟻越遺跡（第１次）から出土した赤色顔料の種類 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）23
Ⅵ　結語 ……25
1．北蟻越遺跡（第１次） ……（城）25
2．津賀２号墳 ……（新名）25
3．赤色顔料貯蔵壺について ……（新名）26

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……3
第２図　遺跡周辺図 ……4
【北蟻越遺跡】
第３図　調査区位置図 ……5
第４図　ＳＨ18平面図・断面図 ……6
第５図　Ａ地区平面図・土層断面図 ……7～8
第６図　ＳＨ８平面図・土層断面図 ……9
第７図　ＳＨ４平面図・土層断面図 ……10
第８図　ＳＨ12平面図・土層断面図 ……11
第９図　ＳＢ１平面図・断面図 ……12
第10・11図　遺物実測図 ……13・14
第12図　Ｂ地区平面図・土層断面図 ……16
【津賀２号墳】
第13図　津賀２・３号墳等高線図 ……17
第14図　２号墳表土除去後等高線図 ……18
第15図　２号墳盛り土除去後等高線図 ……18
第16図　２号墳土層断面図 ……19
第17図　石室平面図・断面図 ……20
第18図　石室内遺物出土状況図 ……21
第19図　遺物実測図 ……22
第20図　赤色顔料のＸ線回折図 ……24
第21図　赤色顔料貯蔵壺一覧 ……27

表　目　次

第１表　北蟻越遺跡遺物観察表 ……15
第２表　津賀２号墳遺物観察表 ……23

図　版　目　次

図版１～３　北蟻越遺跡遺構
図版４～６　北蟻越遺跡遺物
図版７・８　津賀２号墳遺構
図版９・10　津賀２号墳遺物

Ⅰ　前　　言

1．調査の契機

北蟻越遺跡（第１次）・津賀２号墳は、三重県鈴鹿市津賀町南山に所存する周知の遺跡である。当遺跡周辺では、畑作や苗木栽培、酪農が行われおり、当調査地も乳牛を飼育する畜舎に隣接する。

辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業に伴って遺跡の現状変更が予想されたので、古墳部分を除き平成７年の７月に試掘調査を行い、中世の遺物や溝・ピット等の遺構を検出した。これを受けて、県土木部（現県土整備部）との調整協議でも遺跡の保存は困難であるという結論に至り、本調査を行うことになった。

調査は、当事業により改変を受ける平面 2,750㎡、古墳下層遺構 150㎡ の累計 2900㎡ について行った。調査期間は平成 10 年 6 月 17 日～10 月 16 日である。

2．遺跡の名称について

今回調査を実施した北蟻越遺跡（第１次）Ａ・Ｂ地区は周知の遺跡の範囲外ではあるが、試掘調査の結果、当地域にも遺跡が存在することが確認された。そこで鈴鹿市教育委員会との協議の結果、北蟻越遺跡が東に拡大するものと理解した。

3．調査の経過

調査は、事業により掘削されるＡ・Ｂ地区について行った。調査地は、現状が山林や畑であったため、人力により伐開を行った後に重機にて表土を除去し、包含層以下の掘削や切り株の抜根を人力により行った。

調査には、石薬師町、加佐登、広瀬町、木田町、北玉垣町、南玉垣町、高塚町、上箕田に在住の方々に参加して頂いた。ここに記して感謝致します。

牧村　正巳	萩森　俊男	川北　昭二
川北　純吉	勝野　春男	田中　重治
辻　　宏	堀之内一哉	松村　幸雄
伊藤　和代	伊藤　玉子	内田　麗子
村居　典子	桑原うた子	清水　はる
黒田まさ子	坂本やゑの	小河　清角
伴　　安治	小河　　茂	奥村のぶ子
森　　明	水野　　豊	鈴木　義孝
江藤　経子	江藤　琢子	鈴木三代子
仲見　達雄	杉本　正雄	（敬称略）

また、調査区の前地権者井口久治氏には様々な御協力をいただき、調査を円滑に進めることができた。感謝いたします。

〔調査日誌抄〕

6月17日　調査事務所設営。

6月29日　Ｂ地区の表土を重機により掘削。

7月１日　Ｂ地区の表土掘削終了。ピット、土坑等を検出。

7月２日　Ａ地区の表土を重機により掘削。古墳時代の甕などが出土。

7月３日　竪穴住居ＳＨ４を検出。

7月６日　Ｂ地区の遺構掘削を開始。

7月７日　Ａ地区の表土掘削終了。地区杭を設定。

7月８日　Ｂ地区の遺構掘削及び平板測量終了。

7月９日　テント、ベルトコンベアーを設置。Ａ地区の遺構検出開始。津賀２号墳の表土を除去。Ｂ地区の遺構写真撮影。

7月10日　古墳表土より須恵器出土。

7月13日　古墳表土除去後写真撮影。

7月14日　ＳＨ４よりＳ字状口縁甕など土師器片出土。古墳の周溝を検出。

7月15日　ＳＨ４壁・床面を検出。古墳の墳丘にある切り株を除去。

7月21日　古墳の周溝部分を掘削。

7月22日　古墳の周溝が北東部で途切れるのを確認。ＳＨ４の平面を１/10で実測。

7月30日　古墳の周溝より赤色顔料の入った壺が出土（この時点では周溝と理解）。

8月３日　古墳墳丘部のトレンチを掘削。

8月６日　竪穴住居ＳＨ８を検出及び掘削。多くの土師器とともに焼土や炭化材を確認。

8月９日　現地説明会開催、参加者100名。

8月12日　Ａ地区を平板測量。ＳＨ８・ＳＨ12を１/10で実測。津賀２号墳の断面を実測。

8月19日　スカイマスターによりＡ・Ｂ地区全景を撮影。
8月24日　古墳盗掘坑底部で僅かに石室の痕跡を確認。埋土より鉄製品や須恵器等を出土。
8月25日　古墳の等高線図を作成。
8月26日　古墳の石室を1/10で実測。
8月28日　古墳墳丘を掘削。
9月1日　墳丘下より、竪穴住居ＳＨ18の西半分を検出し、ＳＨ18と古墳の周溝が切り合うことを確認。赤色顔料入り壺はＳＨ18に伴うものと理解。
9月4日　作業道具片付け。
9月9日　古墳下層遺構を平板測量。
9月14日　基準点測量。
10月2日　基準点をＧＰＳにより測量。
10月16日　調査作業終了。

4．調査の方法

（1）　地区設定・掘削方法について

今回の調査区は、分断される区画を便宜的にＡ・Ｂ地区と呼称した。Ａ地区には、さらに4ｍ×4ｍグリッドの小地区を設定して調査を行った。掘削方法は、表土を重機で、包含層以下を人力で行った。

（2）遺構図面について

Ａ・Ｂ地区全体の遺構平面図は、1/100の縮尺で平板測量を行った。ただし、掘立柱建物や竪穴住居、古墳石室など主要な遺構図については1/10の縮尺で実測した。土層断面図については1/20の縮尺で実測した。

（3）記録写真について

Ａ・Ｂ地区ともに遺構の全体写真をスカイマスター上から中判カメラ（ペンタックス67）および35㎜カメラ（ニコン）を使用して撮影した。主要遺構についても同器材で撮影した。遺物については室内にて中判カメラにて撮影を行った。なお調査期間中、および遺物整理時に使用したフィルムは、ブローニー（フジネオパン SS／PROVIA 100）および、35㎜（ネオパンSS／SensiaⅡ）である。

（4）文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
　平成10年6月8日付道整第148号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
　平成10年6月16日付教生第90号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鈴鹿警察署長あて）
　平成10年11月17日付教生第8－29号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と歴史的環境

北蟻越遺跡（第１次）・津賀２号墳は、三重県鈴鹿市南山に所在する周知の遺跡である。

鈴鹿山脈を源とする鈴鹿川は、亀山市と鈴鹿市の市境付近で安楽川と合流し、緩やかに蛇行して伊勢湾に注ぐ。北蟻越遺跡（１）・津賀２号墳（２）は、この合流点の北側、鈴鹿市の平野部や鈴鹿川が一望できる標高約46mの丘陵東端部に位置している。

鈴鹿川流域には、北勢地域で最大の前方後円墳である能褒野王塚古墳（３）や金銅製の冠・鏡・太刀・馬具が出土した井田川茶臼山古墳(20)[①]等が存在することから、このあたりに大きな勢力が存在していたことが想像される。さらに、この地域は畿内と東海を結ぶ官道が通過していたと推測され[②]、周辺には伊勢国府跡と考えられている長者屋敷遺跡（５）や伊勢国分寺跡（６）等歴史上重要な遺跡が多く所在している。

このようなことから、この地域は古くから交通の要衝であり、伊勢国の中心地であったと推測される。

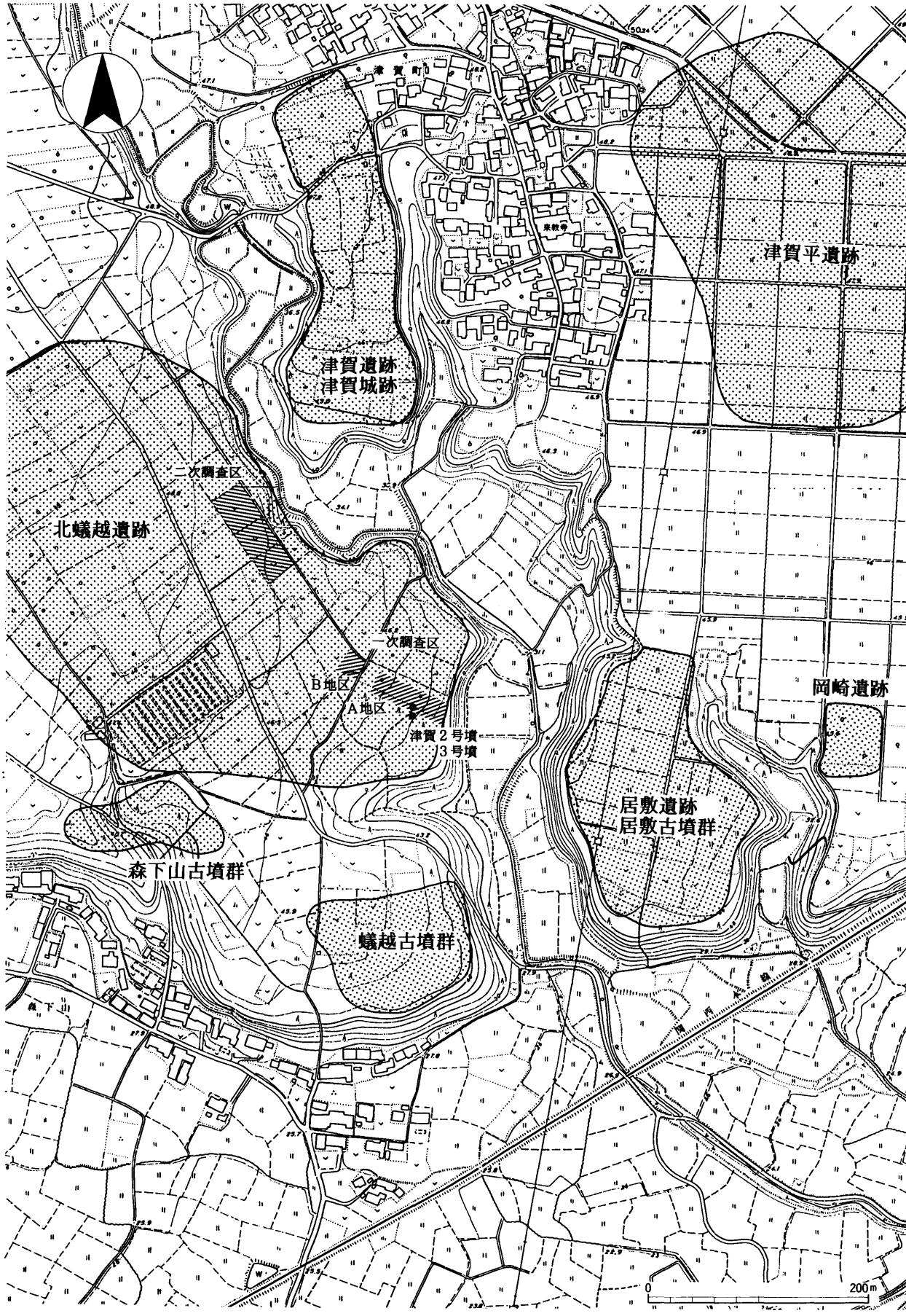
当遺跡の近くには、名越古墳（７）・矢下古墳群（８）・権現ノ下古墳群（９）・森下山古墳群(10)・蟻越古墳群(11)・居敷古墳群(12)・坊主山古墳(13)・綺宮古墳群(14)・加佐登古墳群(15)・加佐登東古墳(16)・白鳥塚古墳(17)・白鳥塚古墳群(18)・南町古墳(19)等多くの古墳が現存している。また、津賀２号墳を含む津賀古墳群も、かつては20基を超える古墳が存在していたが、昭和39年の三重県教育委員会の踏査で確認できたものは６基であった。現在ではこの２号墳と、２号墳の南約10mの所にある３号墳のわずか２基が確認できるのみである。

（城　吉基）

〔註〕
① 小玉道明ほか『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会、1988
② 天野幸夫「鈴鹿の関」『北勢の歴史上巻』郷土出版社、1992

１北蟻越遺跡　２津賀２号墳　３能褒野王塚古墳　４茶臼塚遺跡・古墳群　５長者屋敷遺跡
６伊勢国分寺跡　７名越古墳　８矢下古墳群　９権現ノ下遺跡　10森下山古墳群　11蟻越古墳群
12居敷古墳群　13坊主山古墳　14綺宮古墳群　15加佐登古墳群　16加佐登東古墳　17白鳥塚古墳
18白鳥塚古墳群　19南町古墳　20井田川茶臼山古墳　21津賀城跡　22津賀平遺跡　23岡崎遺跡

第１図　遺跡位置図（１：50,000　国土地理院「亀山」「鈴鹿」より）



第２図　遺跡周辺図（１：5,000）

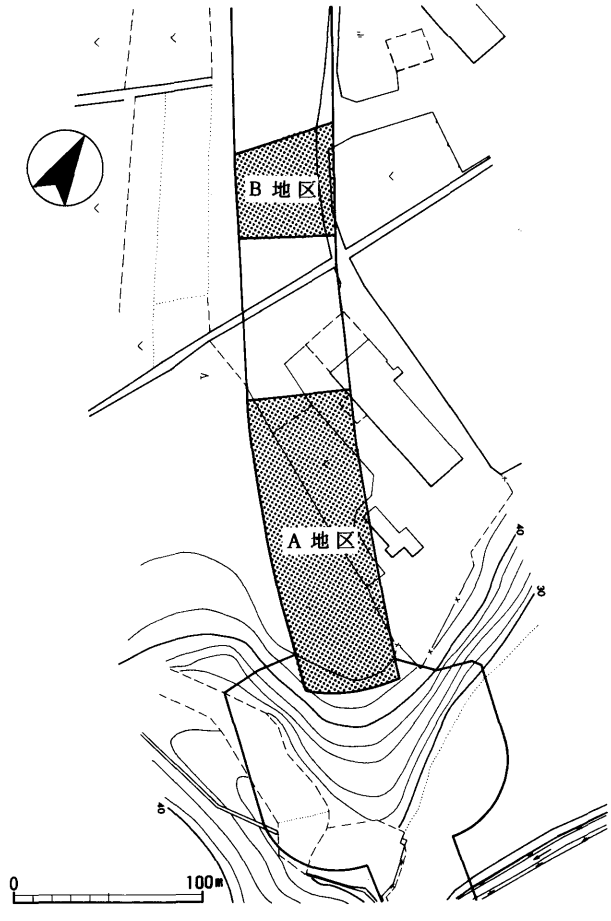
Ⅲ　北蟻越遺跡（第１次）の調査成果

【Ａ地区】

１．地形及び基本層序

調査地は、津賀町一帯に広がる丘陵の東端に位置している。調査区の東側は10m程落ち込む急激な崖となっており、調査区の南東部はその谷に向かって緩やかに傾斜している。調査以前には、畑地や牧場用地として利用されており、そのため調査地の一部で削平を受けていた。しかし、幸い津賀２号墳については良好な状態で残存していた。

層序は、表土下に黒褐色を呈する薄い包含層が存在する。しかし、土器の包含量は少ない。さらに、表土下0.2m程度で黄褐色を呈する地山面を確認した。また、調査区東半部では傾斜地であるためか、ほとんど包含層の堆積は確認できず、表土直下で地山面が確認された。このあたりでは、遺構も検出されなかった。



第３図　調査区位置図（１：2,000）

２．遺構

検出した遺構には縄文時代・古墳時代・時期不明のものがある。遺構の種類は竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピットなどである。以下遺構の種類別に説明する。

（１）縄文時代～弥生時代

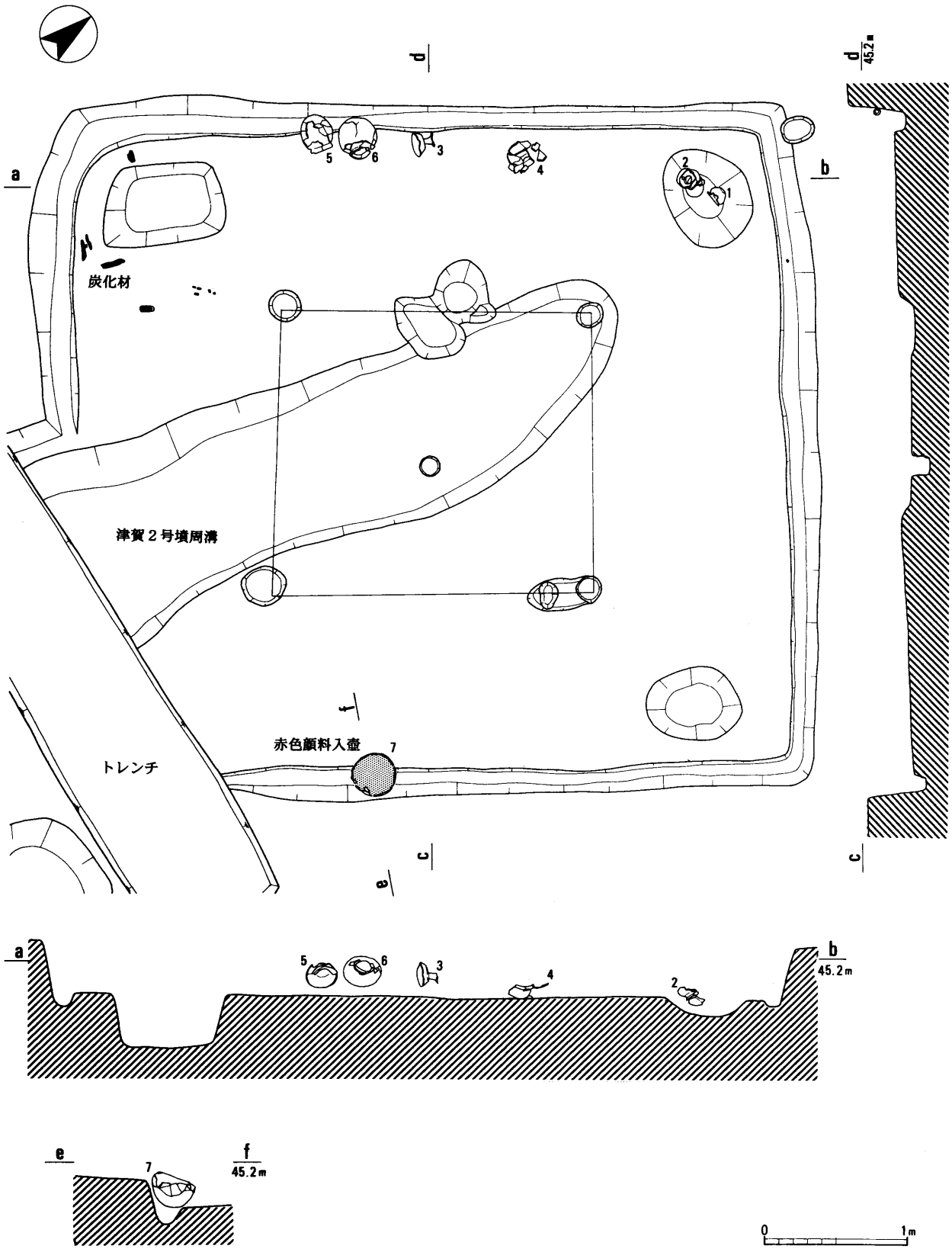
ｄ18グリッドで検出したＳＫ10は長径1.1m×短径0.9mの歪な楕円形を呈し、深さは0.45mを測る。縄文土器の深鉢が出土している。また、ＳＫ９・pit１・pit２からはそれぞれ弥生土器片が出土しており、弥生時代の遺構である。

（２）古墳時代

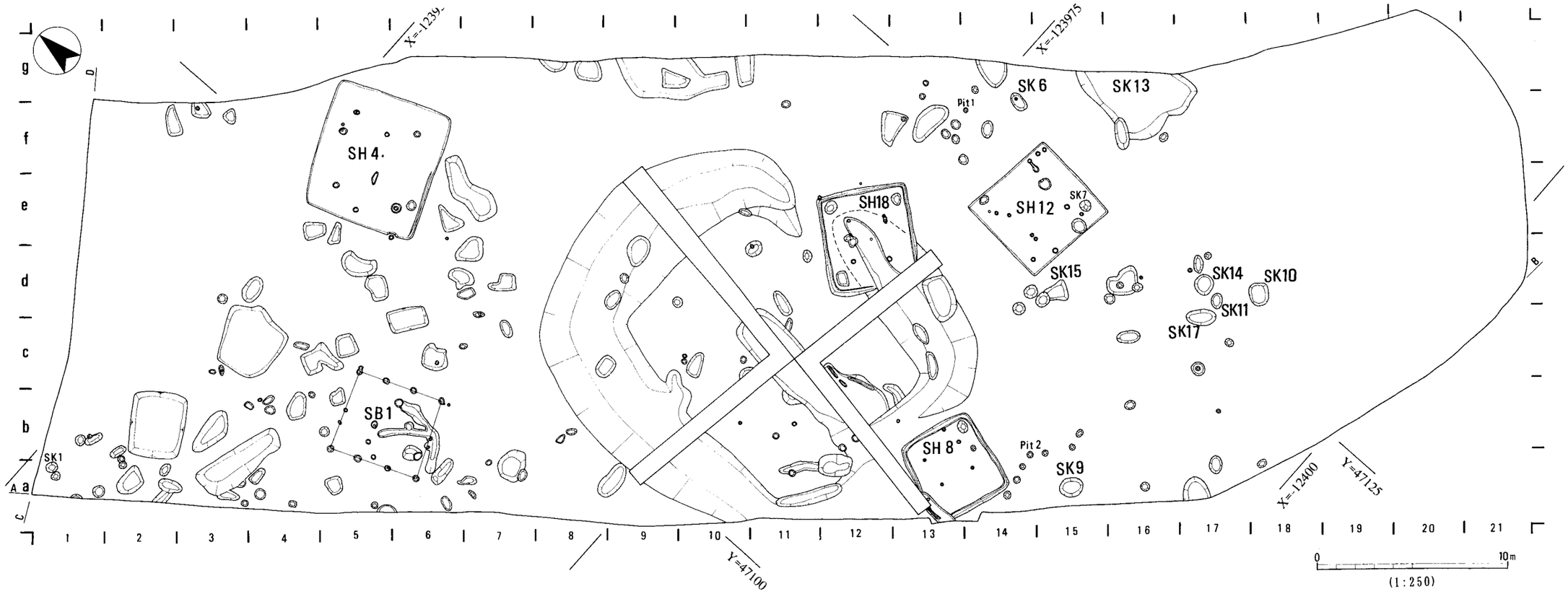
ＳＨ18　ｄ12～ｅ12グリッドで検出した。津賀２号墳の北東裾に位置するため、遺構の中央部が周溝によって削平されていた。東西4.8m×南北約５ｍのほぼ正方形を呈する竪穴住居で、深さは0.4m程度であった。南隅を除いて、各隅には貯蔵穴状の土坑が確認された。そのうち北隅の土坑からは３個体の小型壺が出土している。主柱穴は直径0.15～0.2m、深さ0.3mで、柱間は1.9～2.1mを測る。また、周囲には幅約0.2m、深さ0.06mの壁周溝が巡る。埋土からは多くの炭や炭化材が確認されており、また完形になるような土器が多く出土していることから、焼失家屋であると考えられる。

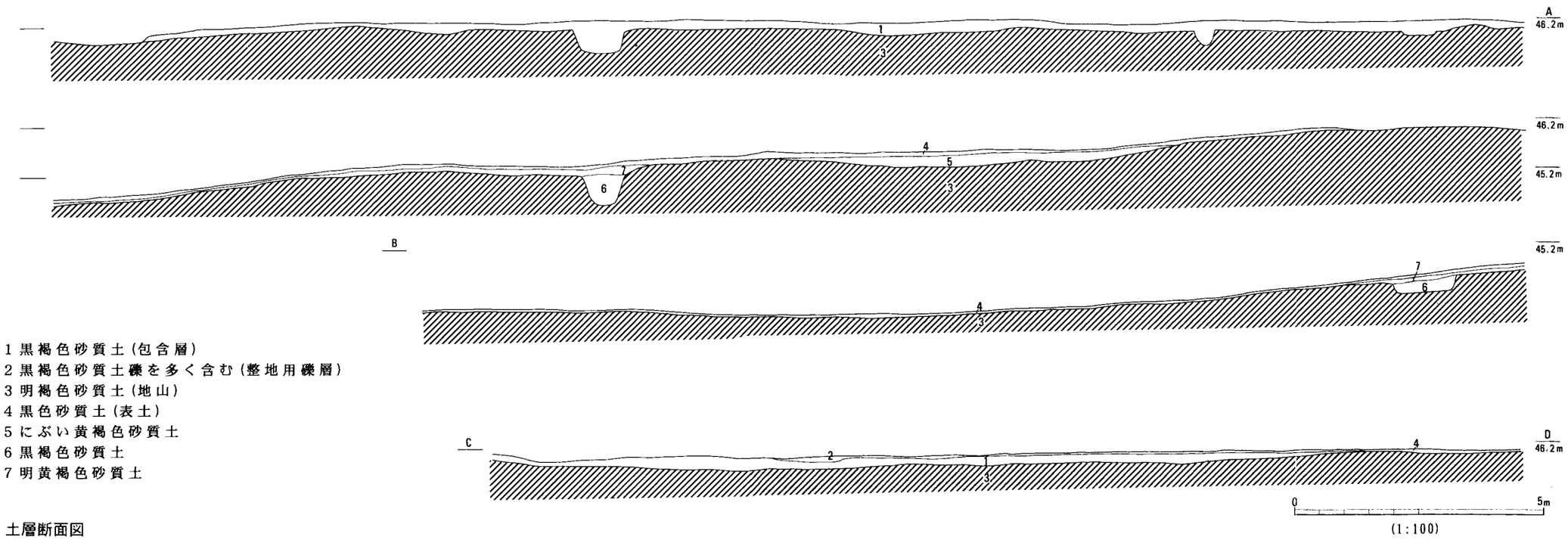
出土遺物は、小型平底壺や高杯、壺などで、西壁周辺や北西隅の土坑からほぼ完形の土器が出土している。また、東壁際からは壁にもたれかかるような状態で赤色顔料の詰まった壺が出土した。上半はすでに破損していたが、破片が壺を検出した高さで周辺に散乱していたため、後世の削平によって破損したものと考えられる。

ＳＨ８　ａ13～ｂ14グリッドで検出した竪穴住居である。津賀２号墳の南東に位置する。東西5.8m×南北5.3mのやや長方形を呈し、深さは検出面より0.3mであった。主柱穴は、やや北よりではあるものの直径約0.25m、深さ約0.3mのピットが４つあり、これがあたるものと思われる。柱間は1.6m～2.1mであった。炉跡については確認できなかった。また



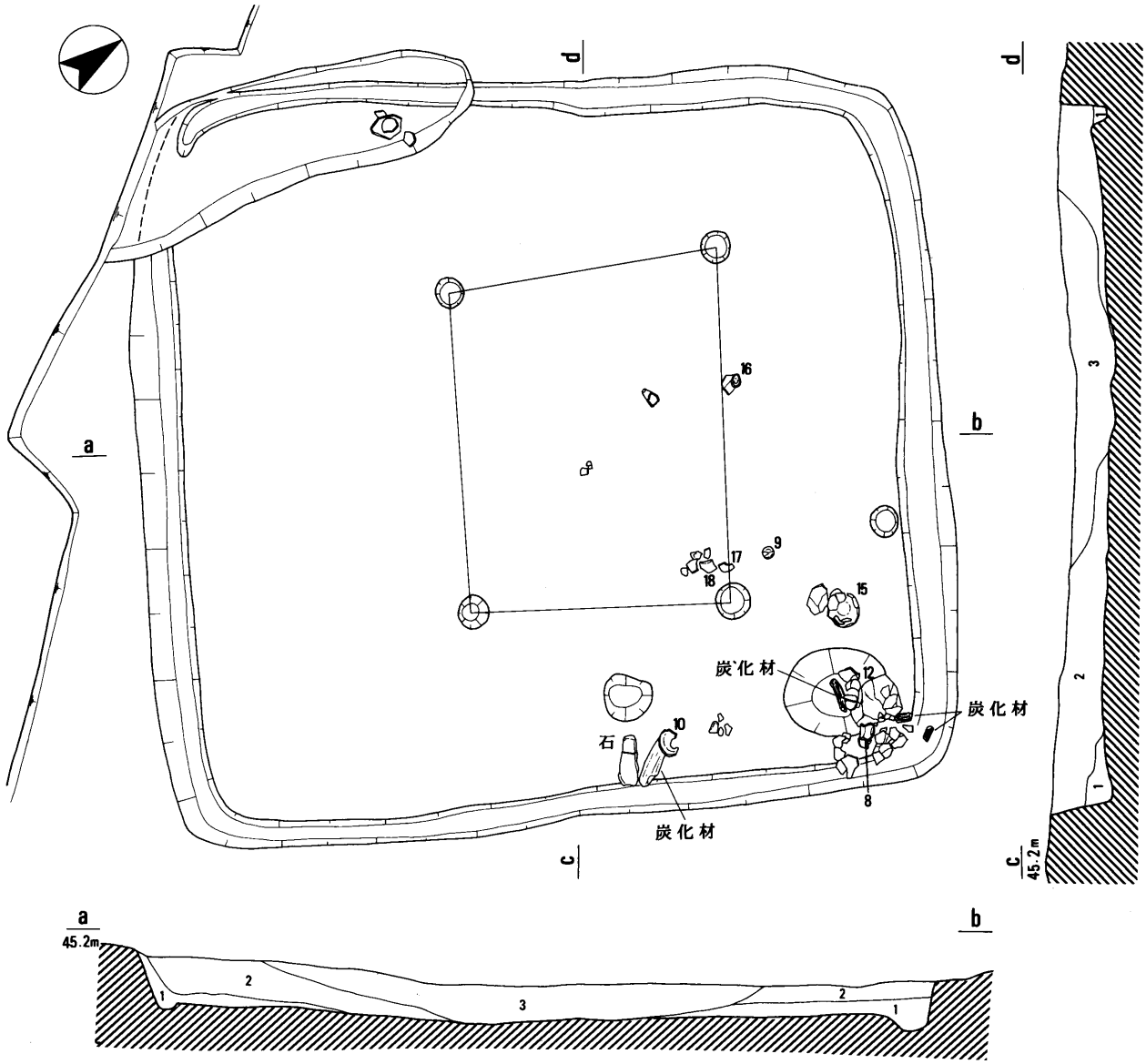
第４図　ＳＨ18平面図・断面図（１：40）





1 黒褐色砂質土（包含層）
2 黒褐色砂質土礫を多く含む（整地用礫層）
3 明褐色砂質土（地山）
4 黒色砂質土（表土）
5 にぶい黄褐色砂質土
6 黒褐色砂質土
7 明黄褐色砂質土

第５図　Ａ地区平面図・土層断面図



第６図　ＳＨ８平面図・土層断面図（１：40）

ＳＨ18同様に、炭や炭化材・焼土、完形に近い土器が多く見られることから、焼失家屋であると考えられる。

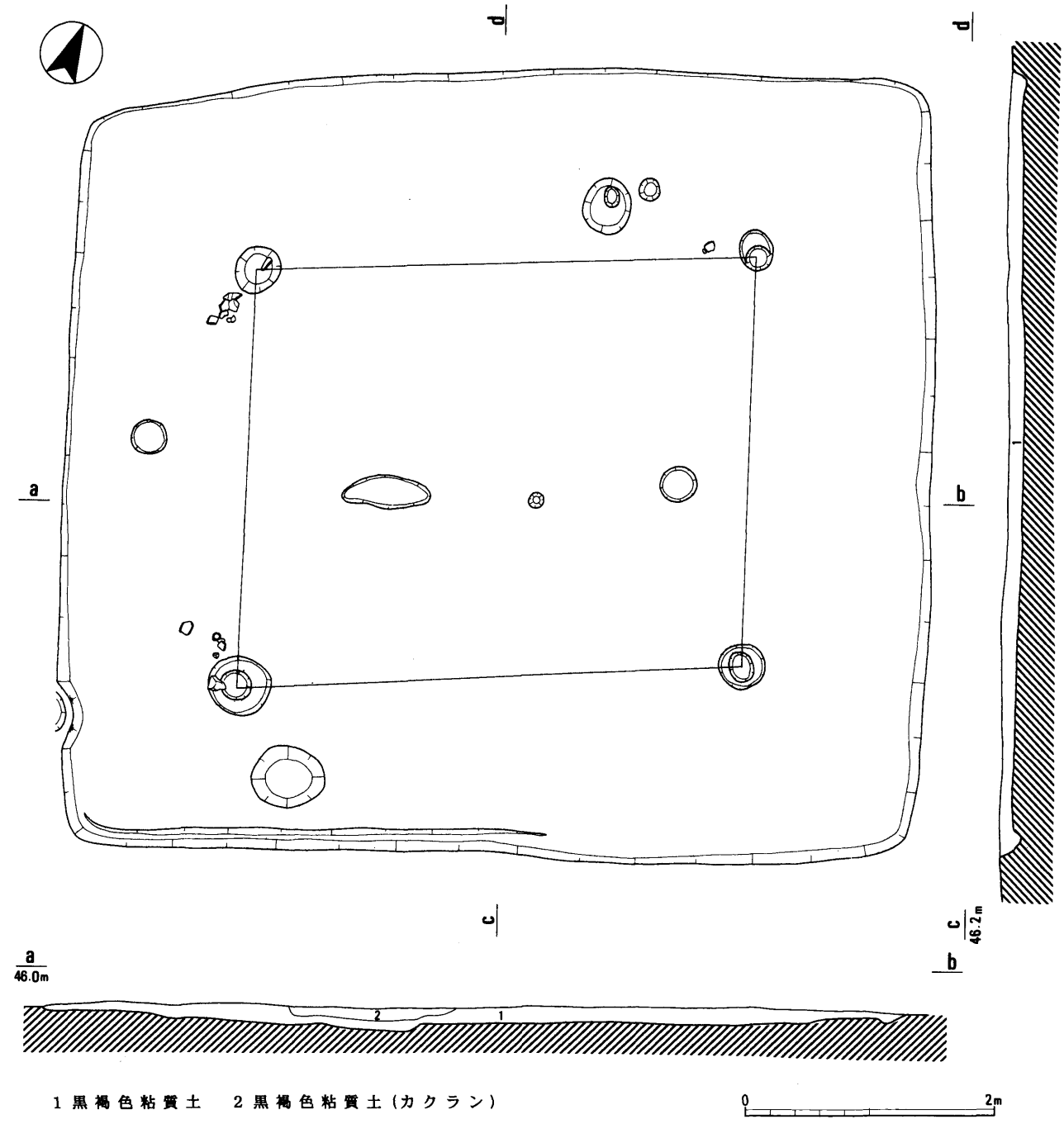
出土遺物は高杯、小型丸底壺や平底壺、丸底甕、くの字状口縁台付甕などである。

ＳＨ４　ｅ４～ｆ６グリッドに位置し、一辺6.7mを呈する方形の竪穴住居で、検出面からの深さはおよそ0.3mである。住居内には直径約0.3～0.5mの主柱穴が４つ確認されるが、柱間は４ｍ～3.3mとやや歪である。また、住居の内側には一部で壁周溝の痕跡が確認された。炉跡については確認できなかった。

埋土内からの遺物は弥生時代中期の壺の破片が混じるものの、Ｓ字状口縁台付甕などが出土している。

ＳＨ12　ｄ12～ｅ15グリッドに位置し、東西約5.3ｍ、南北約５ｍのやや長方形を呈する住居跡で、深さは検出面より0.1m程度であった。主柱穴は直径0.2～0.3m、深さ0.4mで、柱間は東西列が約2.5m、南北列が約1.9mを測る。北東隅には貯蔵穴と思われる土坑がみられる。また、中央やや北寄りの所には僅かに焼土がみられ、炉が作り直された可能性も考えられる。

ＳＫ６　ｆ14グリッドに位置する遺構で、長径１



1 黒褐色粘質土　2 黒褐色粘質土（カクラン）

第７図　ＳＨ４平面図・土層断面図（１：50）

m×短径0.4m、深さ0.24mを測る。須恵器杯身が出土している。

（3）時期不明のもの

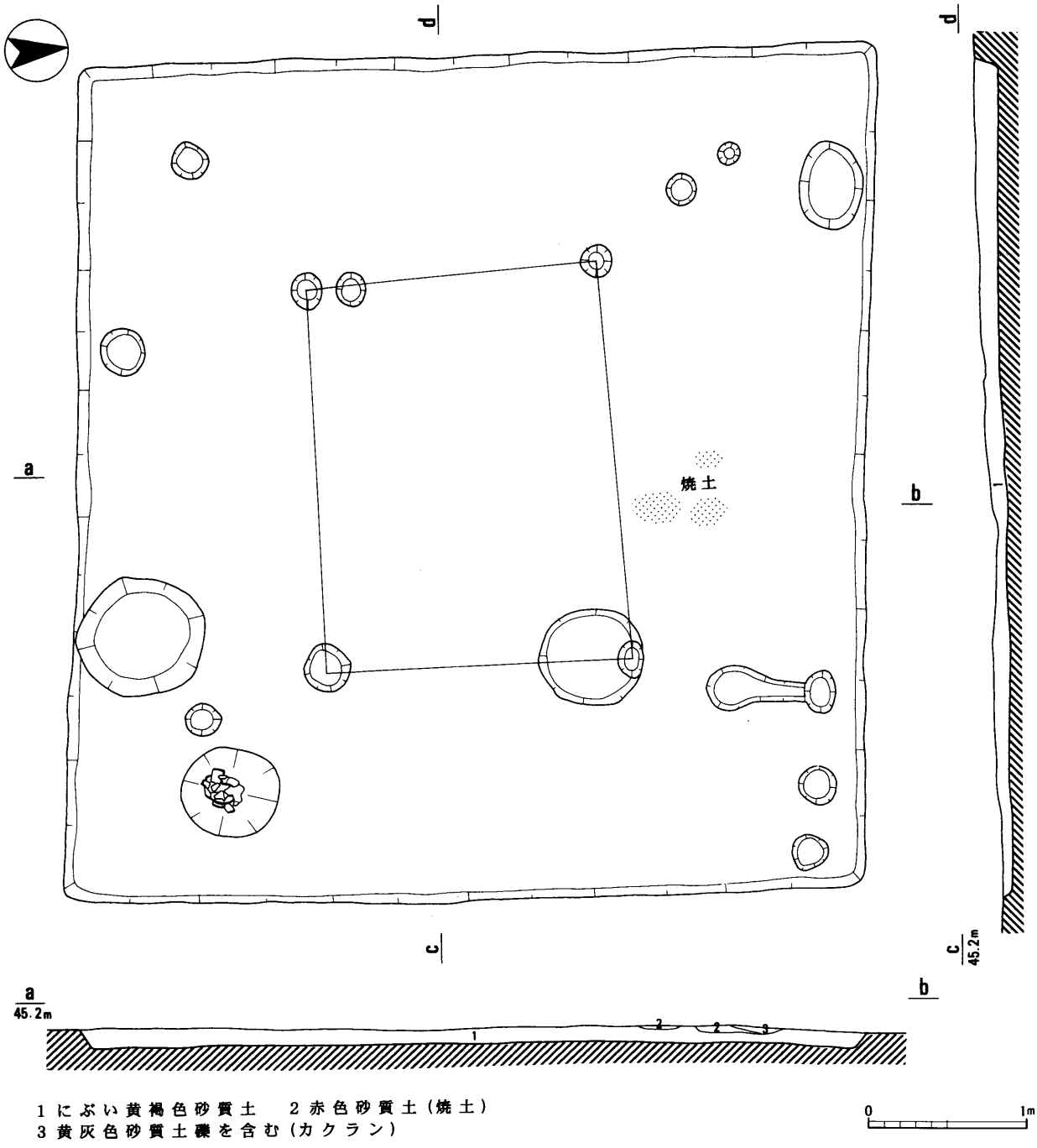
ＳＢ１　ａ６～ｃ５グリッドで検出した。桁行３間(4.8m)×梁行２間(4.3m)の南北棟の掘立柱建物で、棟方向はＮ－21°－Ｗである。柱穴は直径約0.15～0.4m、深さ約0.3～0.6mを測る。遺物が伴わないため時期は不明である。

ＳＫ15　ｄ15グリッドで検出した。長径３ｍ×短径２ｍの歪な楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。土師器片が出土している。

ＳＫ13　ｆ15～16グリッドで検出したが、不定形の土坑で、調査区外に展開する。土師器片が出土。

ＳＫ２　ｂ２～３グリッドで検出した。一辺３ｍの方形を呈し、深さは0.25mである。東半分が試掘坑のため削平されている。出土遺物は伴わない。

ＳＫ17　ｃ17グリッドで検出した。長径１ｍ×短径0.8mの楕円形で、深さは0.3mである。土師器片

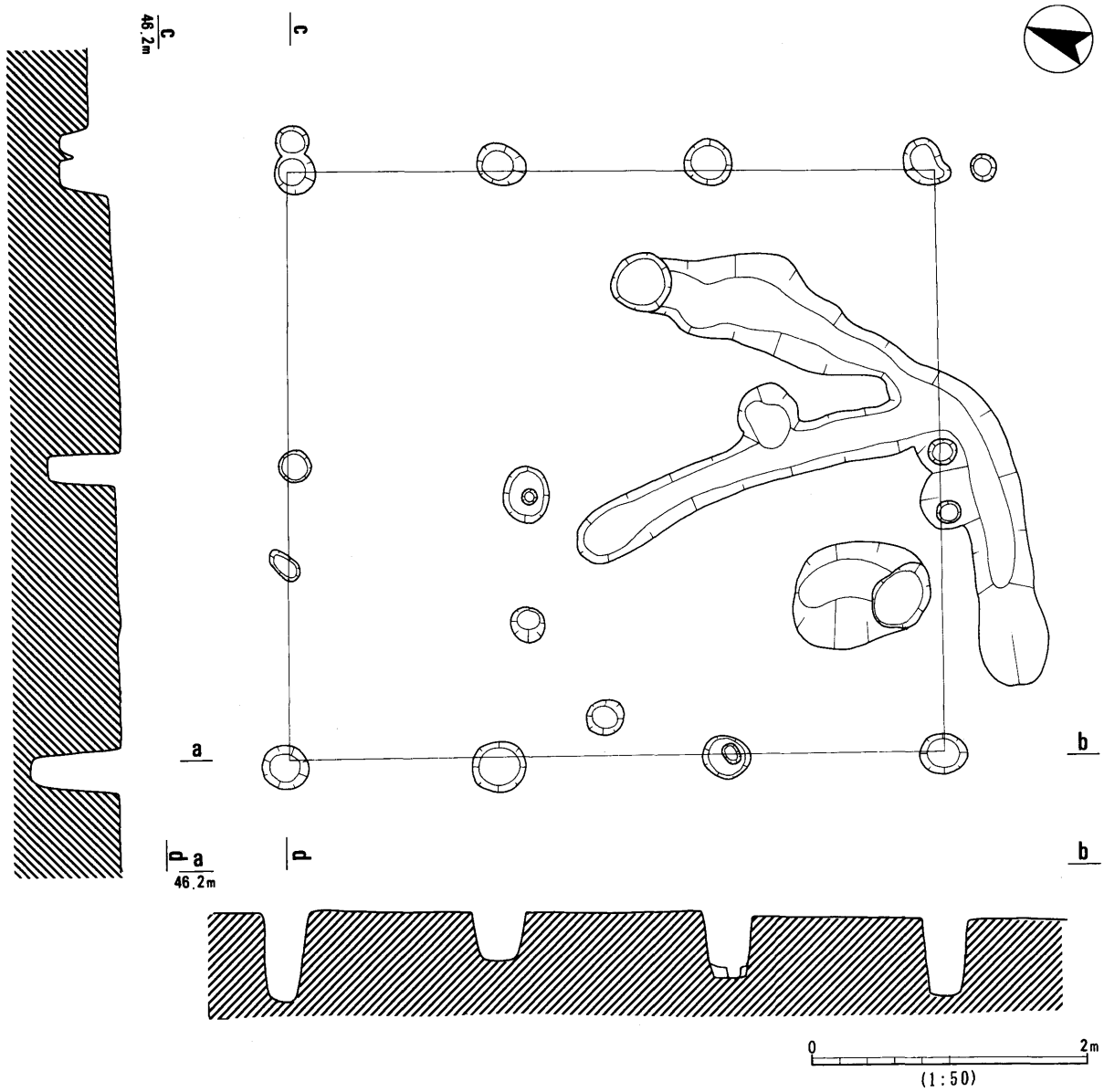


第８図　ＳＨ12平面図・土層断面図（１：40）

が出土している。

ＳＫ14　ｄ17グリッドで検出した。長径１ｍ×短径0.9ｍの楕円形で、深さは0.2ｍである。土師器片が出土している。

ＳＫ11　ｄ17グリッドで検出した。長径0.9ｍ×短径0.7ｍの楕円形で、深さは0.2ｍである。土師器片が出土している。



第９図　ＳＢ１平面図・断面図（１：50）

３．遺物

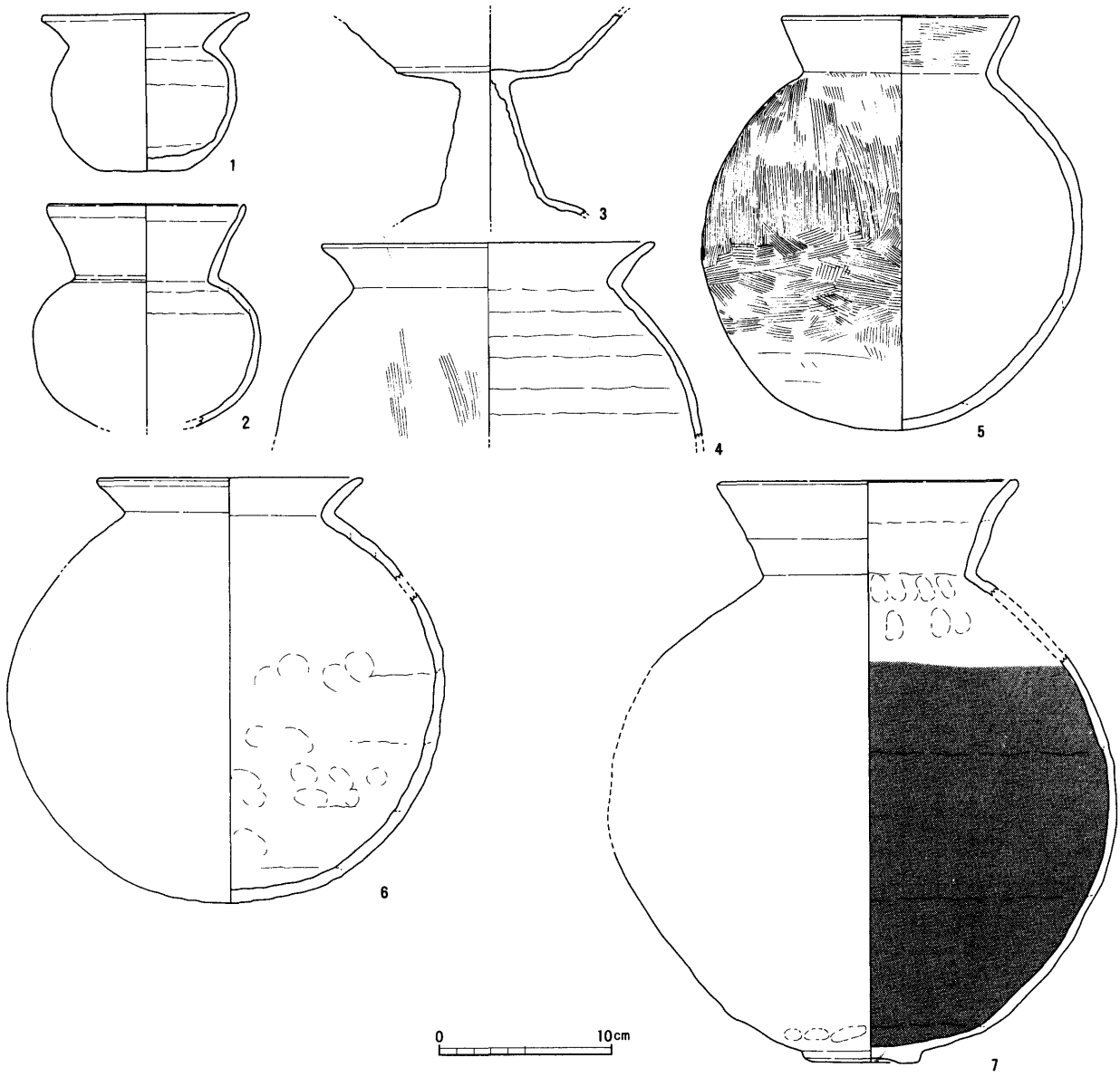
Ａ地区から出土した遺物は整理箱で15箱である。遺物の残存状況は全体的に悪く、器壁が磨滅するものが多い。以下、遺構出土の遺物を中心に概述する。

（１）縄文時代～弥生時代

ＳＫ10からは、縄文土器の深鉢(23・24)が出土している。23は体部、24は底部である。ＳＫ９からは、弥生土器壺の口縁部(28)が出土している。内外面ともにミガキ調整がみられる。Pit１から出土した弥生時代中期の壺(26)は、口縁は受口状のもので、口縁部はナデ、外面にはハケ調整が施される。Pit２から出土した弥生時代中期の壺(27)は、算盤玉形の体部をもつが、体部は風化が著しく調整は不明。

（２）古墳時代

ＳＨ18出土遺物（１～７）　１は平底の小型壺で、ナデ調整が施される。２は薄手の小型直口壺。３は屈折型の脚をもつ高杯。２・３とも風化が著しいが、ナデ調整であろう。４は甕で、体部にハケメを有する。５は口縁部ヨコナデ、体部にハケメを有するくの字形口縁丸底甕。６は調整不明の丸底甕。７は壺で、口縁部ヨコナデ、体部ナデ、内面にはオサエやナデがみられる。全体的に形が歪であるが、最大径は30cm程度である。内部には5686.33ｇに及ぶ大量の赤色顔料が残存していた。赤色顔料は科学分析の結



第10図　北蟻越遺跡出土遺物（ＳＨ18，１：４）

果、第二酸化鉄（ベンガラ）であった。これらの土器の年代については、３の高杯が山城遺跡ＳＨ15出土のものと類似しており、山城Ⅲ式[1]に収まるものと考えられる。

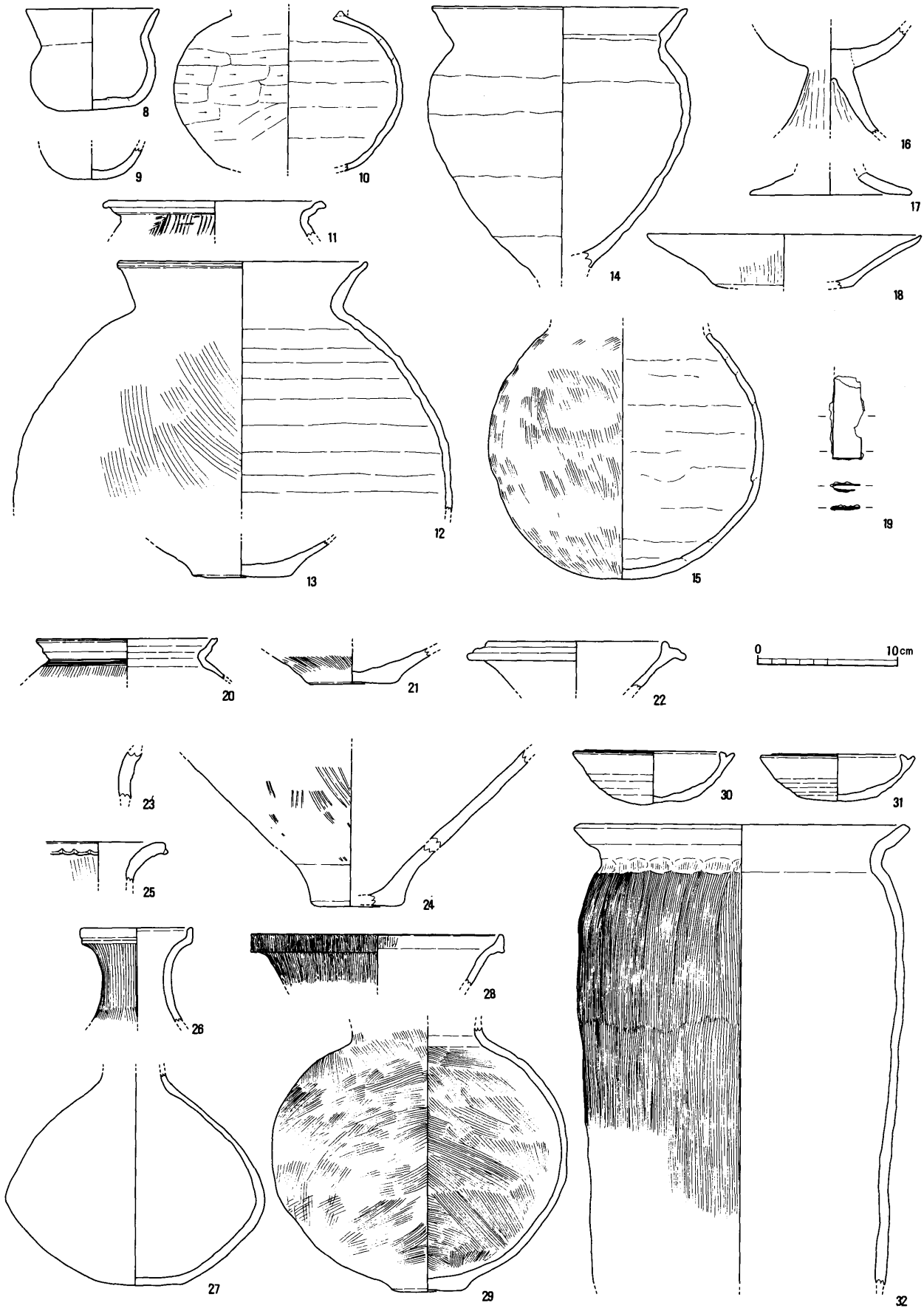
ＳＨ８出土遺物（８～19）　８は平底の小型壺。９は小型丸底壺。両者とも風化が著しく調整は不明であるが、ナデであろう。10は壺で口縁部と底部のみである。11はＳ字状口縁台付甕で山田分類[2]のＤ１類にあたる。12と13は同一個体で、口縁部ヨコナデ、体部ハケメがみられる。14はくの字形口縁台付甕。15は口縁部が残存しないが、体部はハケ調整の丸底の甕で、布留式系的な甕と考えられる。16は椀型高杯で脚部に縦方向のケズリがみられる。19は鉄製品で用途は不明。これらの土器もＳＨ18同様、山城Ⅲ式に収まるものと考えられる。

ＳＨ４出土遺物（20～22）　20はＳ字状口縁台付甕のＢ類[3]にあたる。22は弥生時代中期の壺で混入品。

ＳＨ12出土遺物（29）　内外面ともハケメを有する壺である。口縁部は残存しない。

ＳＫ６出土遺物（30・31）　ともに須恵器の杯身である。田辺編年[4]のＴＫ217式併行期のものである。

包含層出土遺物（32）　体部が著しく長化する長胴甕で、口縁部と体部最大径がほぼ同じである。内部は磨滅が激しく調整は不明である。



第11図　北蟻越遺跡出土遺物（1：4）

No.	遺物番号	器　種	出土遺構など	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存	備　考
1	001 −02	土師器 甕	SH18 貯蔵穴	口径12.0 器高 9.4	風化著しく不明	粗	並	にぶい 橙	5/4	
2	001 −01	土師器 壺	SH18 貯蔵穴	口径11.5	風化著しく不明	やや粗	並	橙	1/3弱	
3	001 −03	土師器 高杯	SH18	−	風化著しく不明	粗	並	にぶい橙	2/3	
4	004 −01	土師器 甕	SH18	口径19.4	口縁：ヨコナデ 外面：ハケ　内面：ナデ	粗	並	浅黄橙	小片	
5	003 −01	土師器 甕	SH18	口径13.8 器高24.4	口縁：ヨコナデ 外面：ハケ	粗	並	にぶい 黄橙	3/4	
6	002 −01	土師器 甕	SH18	口径15.4 体部26.0	口縁：ヨコナデ 内面：オサエ・ナデ	粗	並	にぶい 黄橙	ほぼ 完形	
7	017 −01	土師器 壺	SH18	口径16.4 底径 6.7	口縁：ヨコナデ　外面：ナデ 内面：オサエ・ナデ	やや密	並	にぶい 橙	4/5	赤色顔料（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ） 5686.33g 残存
8	008 −02	土師器 壺	SH8	口径 9.5 器高 7.3	風化著しく不明	やや粗	良	にぶい 黄橙	ほぼ 完形	
9	008 −03	土師器 壺	SH8	−	風化著しく不明	粗	良	橙	小片	
10	009 −01	土師器 壺	SH8	−	外面：ナデ・ケズリ 内面：ナデ・オサエ	粗	良	にぶい 黄橙	1/3	
11	008 −05	土師器 甕	SH8	口径15.4	口縁：ヨコナデ 外面：ハケ	粗	良	にぶい 黄橙	1/2	
12	006 −01	土師器 壺	SH8	口径17.4	口縁：ヨコナデ　外面：ハケ 内面：ナデ	粗	並	浅黄橙	1/4	
13	006 −02	土師器 壺	SH8	底径 7.0	外面：ナデ 内面：ナデ	粗	並	浅黄橙	小片	
14	007 −01	土師器 甕	SH8	口径17.0	口縁：ヨコナデ 外面：ナデ	粗	並	橙	1/3	
15	010 −03	土師器 甕	SH8	−	外面：ハケ 内面：ナデ	粗	並	橙	2/3	
16	008 −01	土師器 高杯	SH8	−	脚部：縦方向にケズリ	やや粗	良	浅黄橙	1/2	
17	008 −06	土師器 高杯	SH8	底径11.6	風化著しく不明	やや粗	良	橙	1/2	
18	008 −04	土師器 高杯	SH8	口径19.8	風化著しく不明	やや粗	良	橙	1/2	
19	015 −03	鉄製品	SH8	−	−	−	−	−	−	酸化著しい 7.33 g
20	011 −01	土師器 台付甕	SH4	口径12.9	口縁：ヨコナデ　外面：ハケ 内面：ナデ	やや粗	並	にぶい 橙	小片	
21	011 −02	土師器 壺	SH4	底径 5.5	外面：ハケ・ナデ	粗	並	にぶい 黄橙	小片	
22	012 −04	弥生土器 壺	SH4	口径13.0	風化著しく不明	粗	並	にぶい 橙	小片	
23	015 −04	縄文土器 深鉢	SK10	−	外面：ハケ？	粗	並	にぶい 橙	小片	
24	018 −01	縄文土器 深鉢	SK10	−	風化著しく不明	粗	並	にぶい 橙	小片	
25	010 −02	弥生土器 壺	SK12	−	口縁：キザミ　外面：ハケ 内面：ナデ	やや粗	並	にぶい 橙	小片	
26	012 −03	弥生土器 壺	Pit 1	口径 8.0	口縁：ナデ　外面：ハケ 内面：ナデ	やや粗	並	浅黄橙	1/2弱	
27	013 −01	弥生土器 壺	Pit 2	−	風化著しく不明	粗	良	にぶい 黄橙	3/4	
28	012 −02	弥生土器 壺	SK9	口径18.0	口縁・内外面：ミガキ	やや密	並	にぶい 橙	1/9	
29	010 −01	土師器 壺	SH12	底径 4.5	外面：ハケ 内面：ハケ・ナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ 完形	
30	016 −02	須恵器 杯身	SK6	口径 9.7 器高 3.9	内外面：ロクロナデ	やや密	並	灰白	ほぼ 完形	
31	016 −01	須恵器 杯身	SK6	口径 9.5 器高 3.3	内外面：ロクロナデ	やや密	並	灰	ほぼ 完形	
32	014 −01	土師器 甕	A−b16 包含層	口径23.2	風化著しく不明	粗	良	にぶい 黄橙	口縁 1/5	

第１表　北蟻越遺跡出土遺物観察表

【B地区】

1．地形及び基本層序

B地区は、A地区の西約40mに位置する。周辺一体には平地が広がる。

基本層序は、表土下に一部黒褐色の包含層が堆積しているが、大部分が削平のため表土直下で礫を多く含む黄褐色の地山面を検出した。

2．遺構

遺構は地山上面で検出した。黒褐色の埋土を含む土坑やピットを確認したが、建物等になるような遺構は確認できなかった。また、遺物も出土していないため、時期も不明である。

（城　吉基）

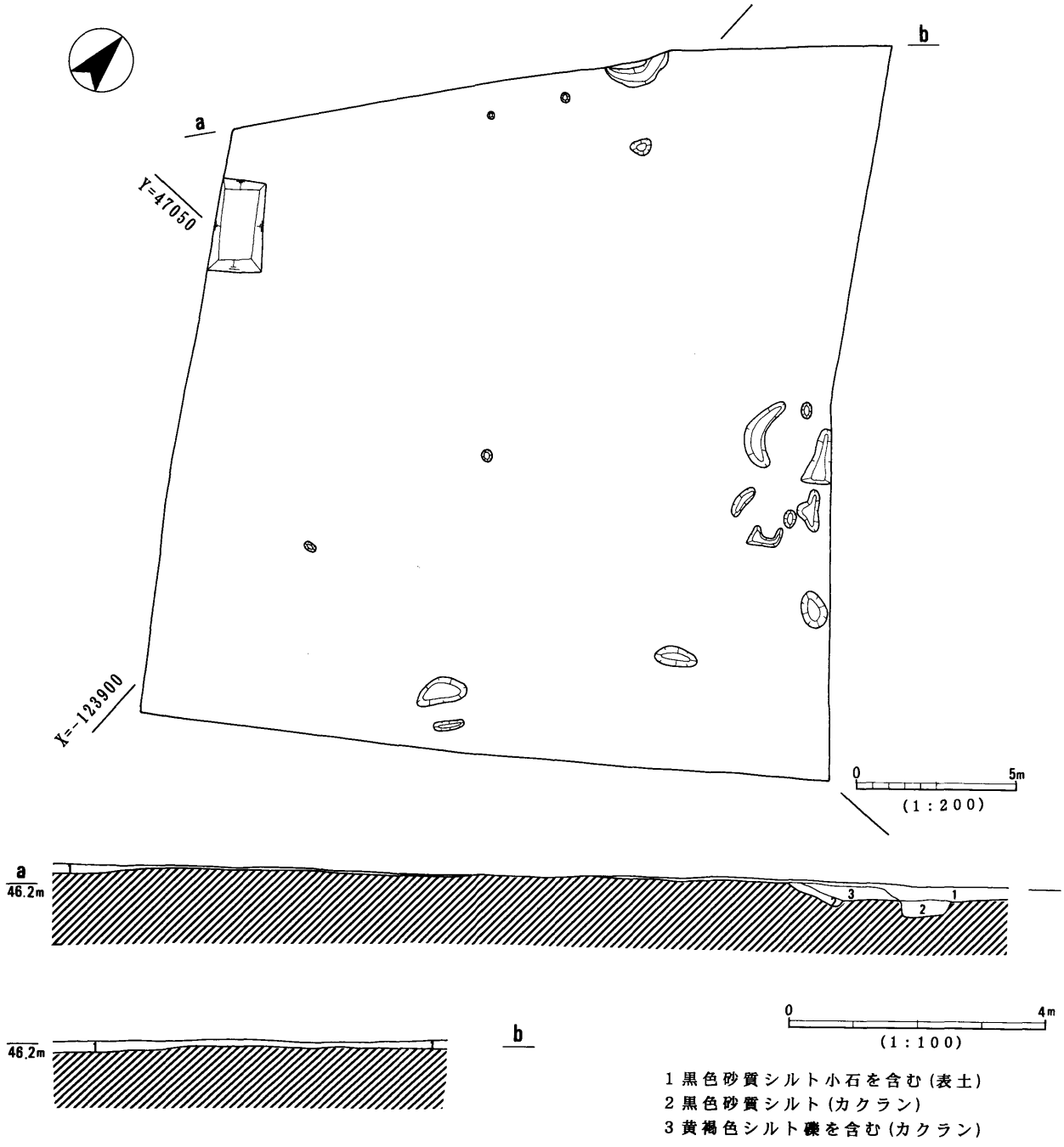
〔註〕

① 山田猛ほか『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994

② 前掲①

③ 山田分類による。赤塚分類ではC類にあたる。（赤塚次郎「「S字甕」覚書'85」『年報　昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター、1986）

④ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981



第12図　B地区平面図・土層断面図

Ⅳ　津賀２号墳の調査成果

１．調査以前の状況

調査以前の津賀２号墳周辺は山林であり、草木が生い茂っている状況であった。

２号墳は約１ｍ程の高まりが残存しており、また、周囲には若干の窪みが巡り、周溝の存在が想定された。墳頂部は４ｍ×７ｍの範囲で長方形に0.5ｍほど窪み、盗掘を受けた痕跡が明らかであった。

３号墳は２号墳の南西約30ｍにあり、高さ0.8ｍ程の高まりが残る。２号墳同様、周囲に窪地が巡り、周溝の存在が想定される。３号墳は事業地外に位置するため、今回は墳丘測量調査を行ったのみである。

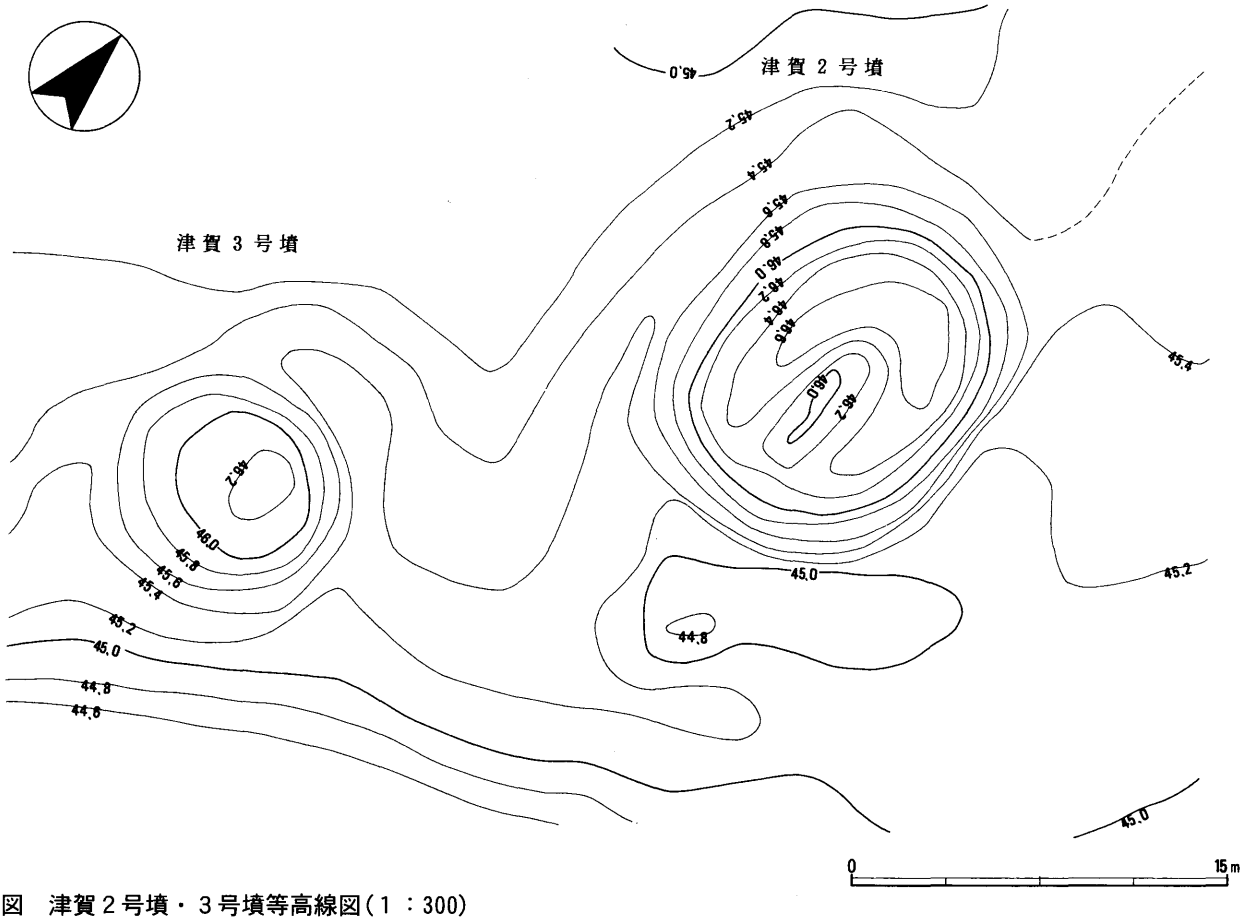
２．遺構

調査は、まず古墳の軸に従ってＬ字状のトレンチを２本開け、層序を確認した。石室部分を調査した後に、墳丘の盛土部分を除去し、古墳下層の遺構を検出した。

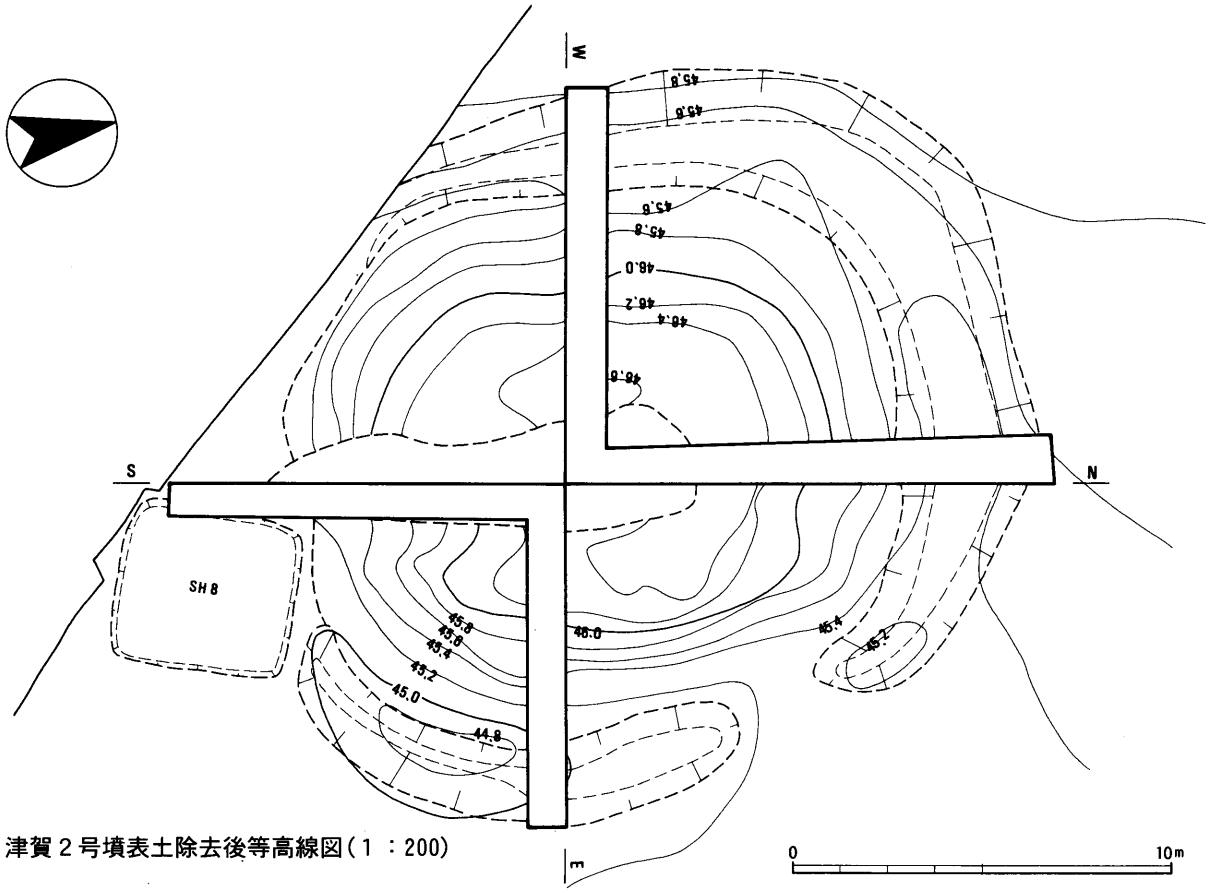
墳形については、当初南北17ｍ×東西15ｍの楕円形を呈する円墳と認識していたが、墳丘盛土を除去すると、古墳の基底部が明らかに長方形に区画されており、南北14ｍ×東西12ｍの方墳と認識した。盛り土の状況は、東西断面では黒褐色粘質色土と明黄褐色粘質色土が交互に積まれている状況が良好に見られたが、南北断面では盗掘の影響からかはっきりとは確認できなかった。

周溝は幅2.5ｍ～３ｍ、深さ0.2ｍ～0.4ｍを測り、古墳南側の開口部付近で不明瞭となる。また、北東部では周溝が明らかに途切れ、陸橋状に掘り残されていた。しかし、一部がＳＨ18と重複していたために周溝の埋土との区別ができず、陸橋状部分の幅は確認できなかった。

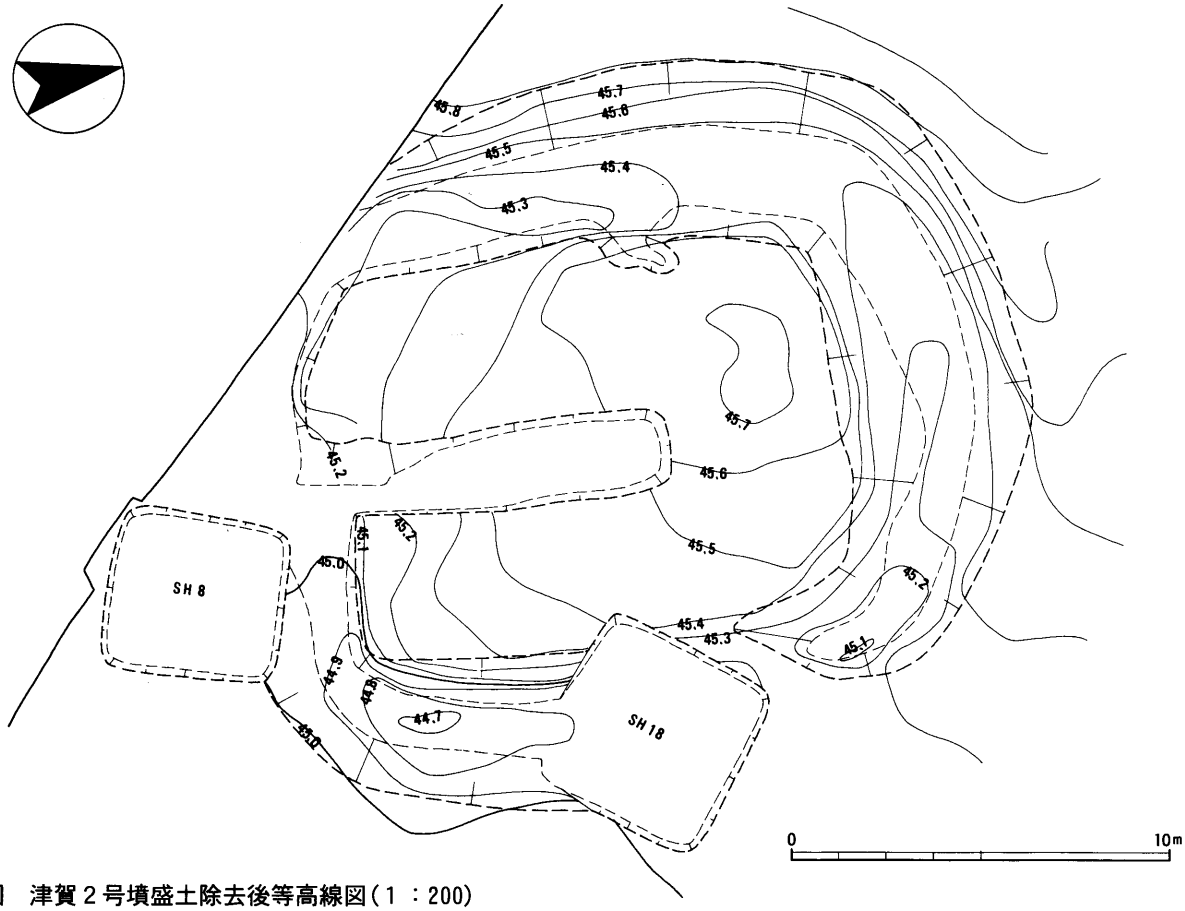
埋葬部分については、後世の盗掘によって攪乱を受け、石材や副葬品はほとんど残ってはいなかったが、幸い底面において敷石の一部と思われる細かい礫群を確認することができた。礫群の周囲にはいく



第13図　津賀２号墳・３号墳等高線図（１：300）

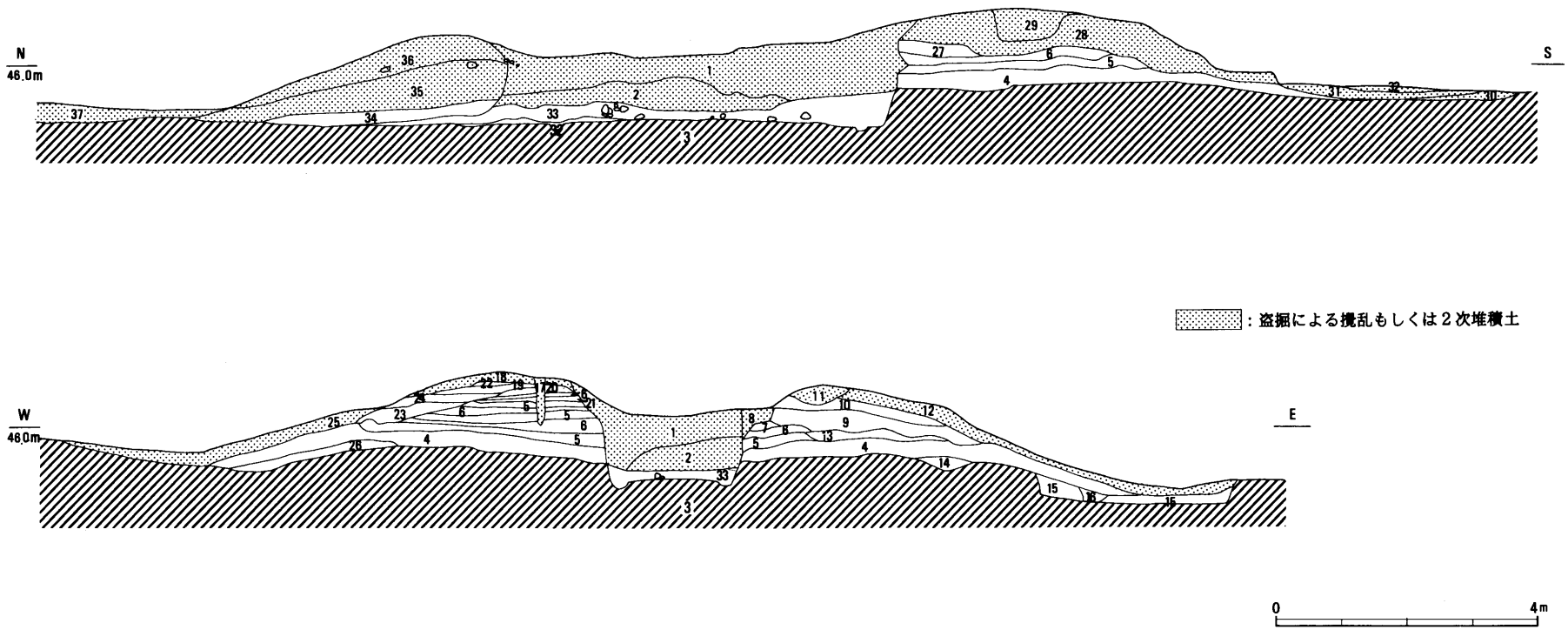


第14図　津賀２号墳表土除去後等高線図(１：200)

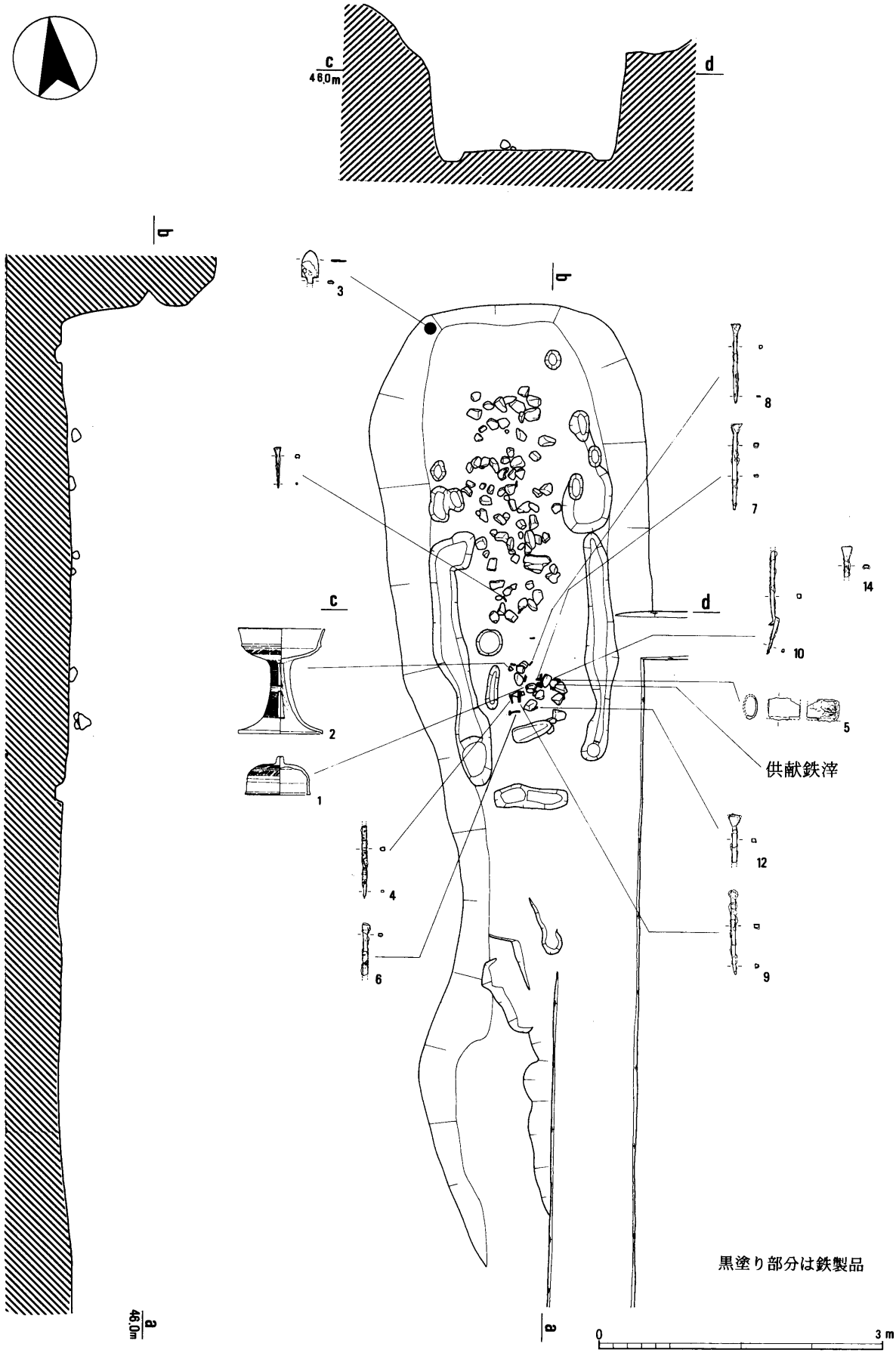


第15図　津賀２号墳盛土除去後等高線図(１：200)

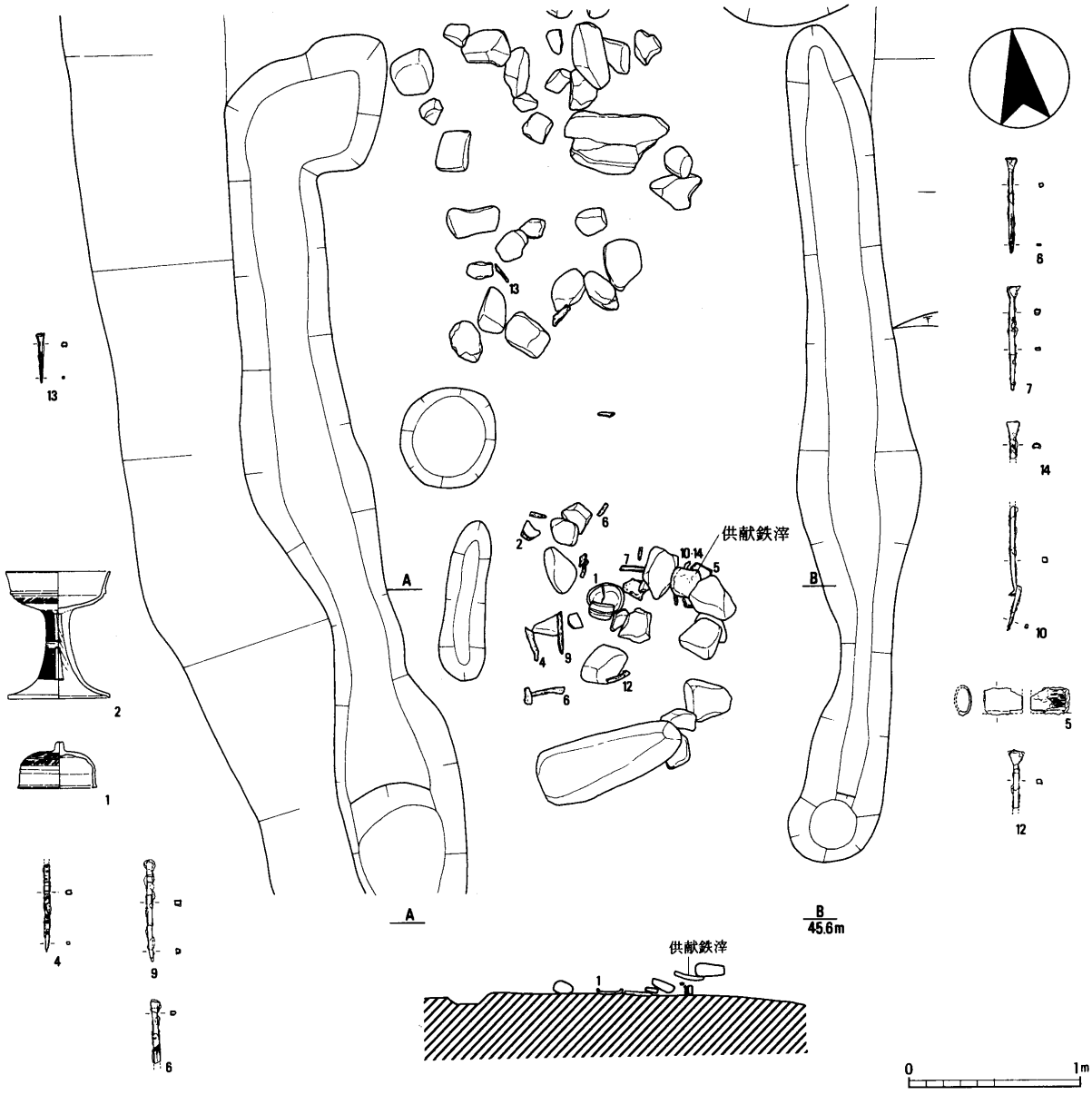
第16図　津賀２号墳・墳丘土層断面図（１：100）



1. 黄褐色砂質土（石を含む）〔盗掘後堆積土〕
2. オリーブ褐色砂質土（小石を含む）〔盗掘後堆積土〕
3. 明黄褐色粘質土〔地山〕
4. 暗灰黄色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 明黄褐色粘質土
7. 明黄褐色砂質土
8. 明黄褐色粘質土に暗灰黄色粘質土混じる〔盗掘後堆積土〕
9. オリーブ褐色砂質土（小石を含む）
10. 暗灰黄色砂質土（小石を含む）
11. 黄灰色砂〔表土堆積土〕
12. 黄褐色砂質土（小石を含む）
13. にぶい黄褐色粘質土
14. 褐灰色粘質土
15. 灰黄褐色砂質土（炭を含む）〔ＳＨ１８埋土〕
16. 暗灰黄色粘質土
17. 黄褐色砂
18. 明黄褐色砂質土
19. 明黄褐色砂質土（小石を含む）
20. 黄褐色砂質土
21. オリーブ褐色砂質土
22. 明黄褐色砂（小石を含む）
23. 明黄褐色砂質土
24. 黄色砂（小石を含む）
25. 暗灰黄色砂
26. 明黄褐色粘質土
27. 暗灰黄色粘質土で黒褐色粘質土混じる
28. 黄褐色砂質土（小石を含む）
29. 黒褐色砂
30. 灰黄褐色砂質土
31. 黄橙色砂質土
32. 黒褐色粘質土（石を含む）
33. 暗灰黄色粘質土（礫を含む）
34. 黒褐色粘質土
35. 暗灰黄色砂質土（小石を含む）
36. にぶい黄色砂質土（小石を含む）
37. 明黄褐色砂質土



第17図　津賀２号墳石室平面図・断面図（１：60）



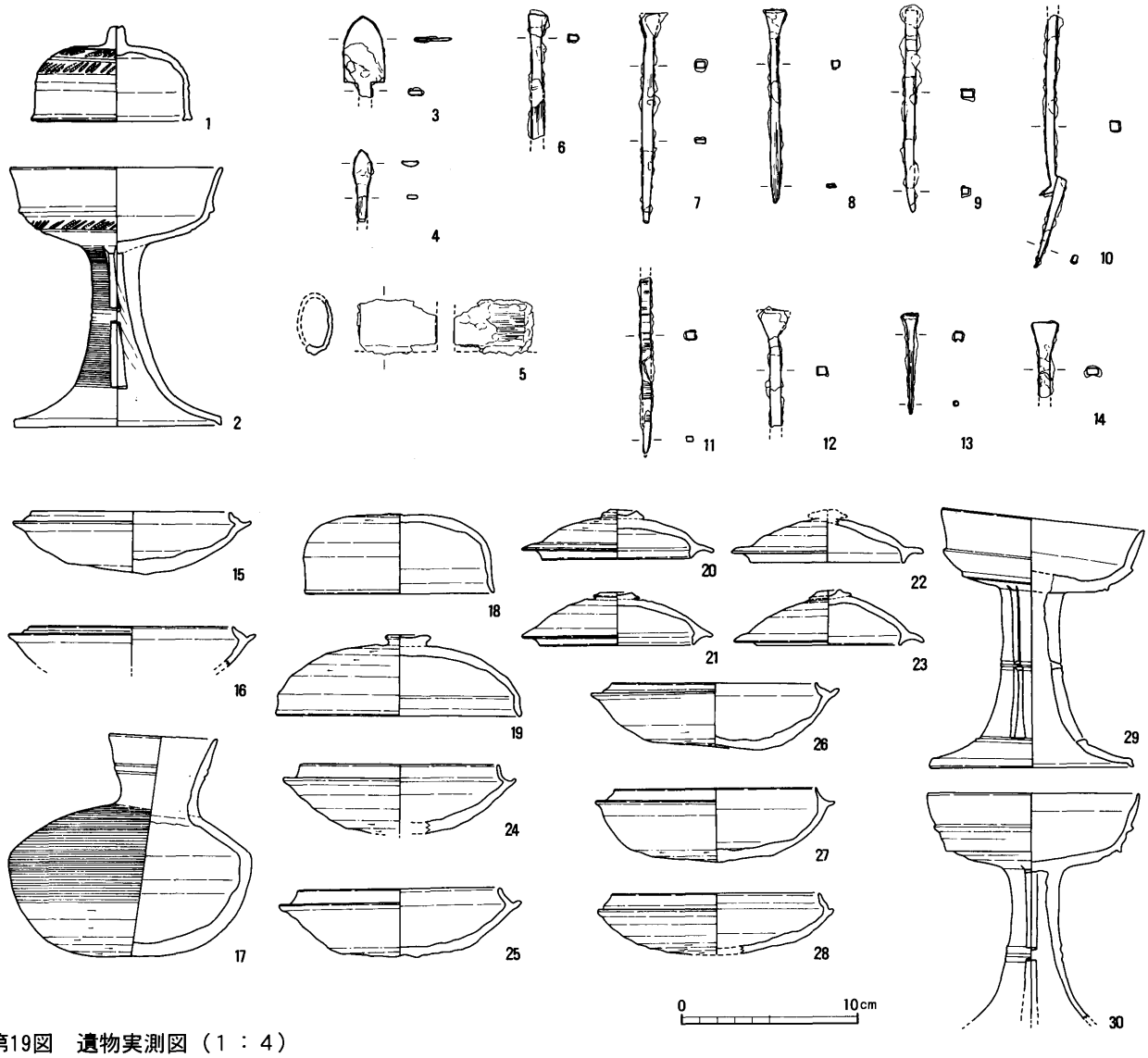
第18図　石室内遺物出土状況図（1：40）

つかの窪みが残っており、おそらくは石材の抜き取り痕と思われる。また、埋葬部分から南の部分については層の乱れがあり、羨道が埋没したものと考えられる。これらのことにより、埋葬部分は横穴式石室であったと考えられる。石室の規模については、礫群の南側に横方向の石材抜き取り痕がみられ、ここまでを石室の範囲と考え、長さ約5m・幅約1.8mであった。

出土遺物は、石室内からは須恵器蓋・高杯・鉄鏃・鉄釘・馬具・鉄滓が出土しているが、大半は敷石の間に混じって出土したものでる。これらについては出土品の構成から、石室築造時に混入したとものというよりは、副葬品で盗掘時に破損した物と考えられる。また、墳丘盛土内からは須恵器杯身・平瓶が、墳丘裾からは須恵器杯蓋・杯身が出土している。

3．遺物

石室出土遺物（1～14）　1は須恵器の蓋で、突起状のつまみが付く。体部上面には2条の刺突文が巡り、間は沈線で区切られる。四日市市御池古墳出土の三足壺の蓋[①]に酷似している。2は長脚二段スカシの無蓋高杯。杯部には刺突文が巡る。脚部にはカキメが施される。3・4は鉄鏃。5は刀の鞘の部分であろうか、内面には木質が残る。6～14は鉄釘で、頭の部分が逆三角形に広がる。13は小型のもの。このほか、図化できないもので、馬具の一部や鉄滓塊も出土している。この鉄滓塊は長径10.5cm×短径7.5



第19図　遺物実測図（1：4）

cmの楕円形で、厚さ1cm程度、重さは184.5gであった。大きさや出土位置から考えても混入したものとは考えがたいことから、供献鉄滓と思われる。

墳丘盛土内出土遺物(15～17)　15・16は須恵器杯身。17は平瓶。体部上半にはカキメが巡り、下半はケズリがみられる。口頸部には2条の沈線が巡る。

墳丘裾部出土遺物(18～30)　18は壺の蓋。19は高杯蓋。2～23は須恵器杯蓋。かえり部は口縁部よりも下に伸びる。つまみは宝珠形にはならず、上部を押し込んで窪みをつくる。24～28は杯身。29・30は長脚二段スカシの高杯。ともに杯部に稜をもち、下半には沈線が巡る。

津賀2号墳から出土した須恵器は、田辺編年[②]のTK43～TK209型式併行期にあたり、古墳の築造年代は6世紀末～7世紀初頭と考えたい。また、墳丘裾部出土遺物のほとんどは開口部付近より出土しており墓前祭祀が行われた可能性が考えられる。

（新名　強）

〔註〕

① 春日井恒『御池古墳群』四日市市遺跡調査会、1993

② 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981

No.	遺物番号	器　種	出土遺構など	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	001−08	須恵器蓋	石室	口径 8.5 器高 5.5	ロクロナデ 天井部：刺突文	やや密	並	灰 オリーブ	完形	
2	003−01	須恵器高杯	石室	口径12.2 器高14.9	ロクロナデ 杯部外面：刺突文　脚部：沈線	やや密	良	灰	3/4	底径12.0cm 長脚二方二段スカシ
3	006−06	鉄鏃	石室	−		−	−	−	一部欠損	7.27g
4	006−05	鉄鏃	石室	−		−	−	−	一部欠損	1.91g
5	006−04	鉄製品	石室	−		−	−	−	1/2	9.72g 内面に木質残る
6	006−02	鉄釘	石室	−		−	−	−	1/2	10.35g 木質？残る
7	005−04	鉄釘	石室	−		−	−	−	完形	18.98g
8	005−02	鉄釘	石室	−		−	−	−	完形	10.96g
9	005−05	鉄釘	石室	−		−	−	−	完形	23.08g
10	005−01	鉄釘	石室	−		−	−	−	一部欠損	21.39g、別の釘が付着 一部木質？残る
11	006−01	鉄釘	石室	−		−	−	−	2/3	10.20g 木質？残る
12	005−06	鉄釘	石室	−		−	−	−	1/2	12.50g
13	005−03	鉄釘	石室	−		−	−	−	完形	4.26g
14	006−03	鉄釘	石室	−		−	−	−	1/3	7.02g
15	003−02	須恵器杯身	墳丘盛土内	口径11.5 器高 3.5	ロクロナデ・仕上げナデ 底部：ヘラ切り後未調整	やや密	並	灰	1/2	
16	001−05	須恵器杯身	墳丘盛土内	口径11.6	ロクロナデ	やや密	並	灰黄	口縁1/7	
17	004−01	須恵器平瓶	墳丘盛土内	口径 6.4 器高12.5	口縁部：ナデ 体部：カキメ・ロクロナデ	やや粗	並	灰	1/4	体部径 14.0cm
18	002−02	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径10.6 器高 4.6	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや密	良	灰白	1/4	
19	002−05	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径14.0 器高 4.7	ロクロナデ・ケズリ	やや密	良	暗緑灰	1/8	石室埋土の破片と接合
20	002−01	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径 8.5 器高 2.9	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	密	良	灰白	3/4	
21	002−03	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径 8.8 器高 3.0	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや粗	良	灰白	1/4	
22	001−06	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径 8.8	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや密	並	灰白	1/6	
23	001−07	須恵器杯蓋	墳丘裾	口径 5.8 器高 3.2	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや密	並	灰黄	1/2	
24	002−04	須恵器杯身	墳丘裾	口径11.3	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや密	良	灰白	3/8	
25	001−01	須恵器杯身	墳丘裾	口径11.5 器高 4.0	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや粗	並	緑灰	ほぼ完形	
26	003−03	須恵器杯身	墳丘裾	口径12.8 器高 3.8	ロクロナデ・仕上げナデ 底部：ヘラ切り後未調整	やや粗	並	灰	小片	受部径 14.3cm
27	002−07	須恵器杯身	墳丘裾	口径11.6 器高 4.2	ロクロナデ・仕上げナデ 底部：ヘラ切り後未調整	密	良	灰白	小片	
28	002−06	須恵器杯身	墳丘裾	口径12.0	ロクロナデ・ケズリ・仕上げナデ	やや密	良	灰	1/8	
29	003−04	須恵器高杯	墳丘裾	口径11.7 器高14.9	ロクロナデ	やや密	並	浅黄	1/3	底径12.0cm 長脚三方二段スカシ
30	003−05	須恵器高杯	墳丘裾	口径12.0	ロクロナデ	やや密	並	灰	1/3	長脚二方二段スカシ

第２表　津賀２号墳遺物観察表

Ⅳ　北蟻越遺跡(第１次)から出土した赤色顔料の種類

はじめに

北蟻越遺跡では、４世紀～５世紀の集落跡が検出されている。このうち、焼失家屋（ＳＨ18）からは、赤色顔料を貯蔵した土師器壺が出土している。

日本における赤色顔料としては、辰砂（水銀朱）やベンガラ（赤鉄鉱など）が一般的である。これらは、Ｘ線回折分析により識別することが可能である。本報告では、これらの赤色顔料についてＸ線回折分析を行い、その種類を明らかにする。

１．試料

北蟻越遺跡の焼失家屋（ＳＨ18）の土師器壺の中に貯蔵されていた赤色顔料１点である。

２．方法

分析は、足立（1980）および日本粘土学会（1987）を参考とした。土壌中に混在する赤色顔料をピンセットで抽出した後、105 ℃で２時間乾燥した。これをメノウ乳鉢で微粉砕した後、アセトンを用いてスライドグラスに塗布し、Ｘ線回折分析をした。作成したＸ線回折試料について、以下の条件で測定した。

同解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物、または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

装　置：島津製作所製　ＸＤ－３Ａ

Time constant：2.0 sec

Target：Cu（Ｋα）	Scanning Speed: 2°/min
Filter：Ni	Chart speed：2 cm/min
Voitege：30 KVP	Divergency：1°
Current：30 mA	Recieving Slit：0.3 mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：2～45°

３．結果

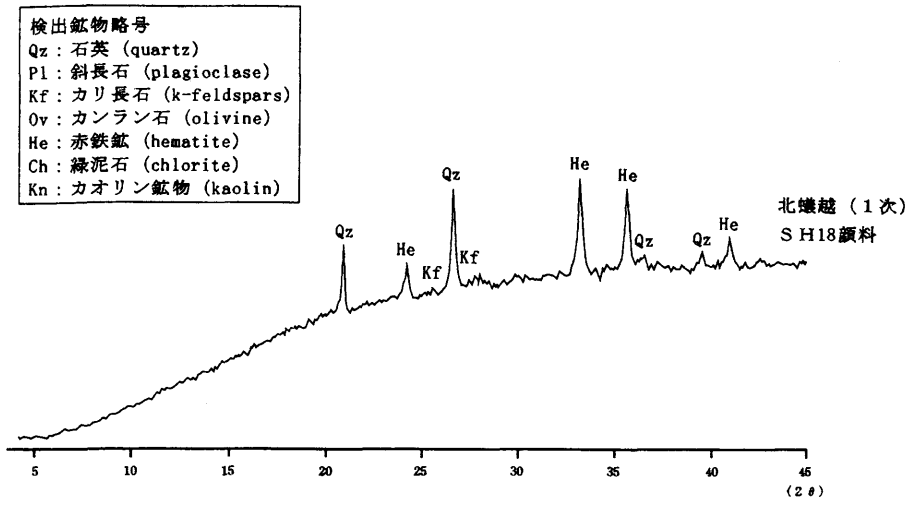
各赤色顔料のＸ線回折図を、図１に示す。以下に、試料の観察結果について記す。

・北蟻越（第１次）ＳＨ18顔料

ピークとして検出された鉱物は、石英（quartz）、赤鉄鉱（hemataite）、カリ長石（k-feldespars）の３種類である。なお、本試料は約 20°（２θ）付近から著しくベースが高くなっていることから、酸化鉄を多く含んでいることが指摘される。

４．考察

土師器壺に貯蔵されていた赤色顔料は、検出鉱物



第20図　赤色顔料のＸ線回折図

として赤鉄鉱が認められることから、ベンガラと判断される。遺跡から出土する赤色顔料は、辰砂（水銀朱）、赤鉄鉱（ベンガラ）などが知られている。辰砂は、水銀鉱床から得られるため、産出地が限られている（市毛、1998）。三重県下には、大和水銀鉱床に含まれる丹生鉱山（多気郡勢和村）があり、古くから利用されていたことが知られている（加納、1997）。

一方、ベンガラは、赤鉄鉱の他にも黄鉄鉱等の様々な鉄鉱物から精製できる（本田、1997）。また、近年の調査では、水たまり等で鉄バクテリアの活動によって、作られる赤色の酸化鉄に富む沈殿物も利用されていたことが明らかとなっている（岡田、1997；降幡・沢田、1997）。そのため、日本各地で安易に入手あるいは精製でき、最も一般的な赤色顔料であったと考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

［引用文献］

・足立吟也（1980）粉末X線回折法.
「機器分析のてびき3」. P.64－76, 化学同人.

・本田光子（1997） 出土ベンガラの多様性について.
日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, P.78－79.

・市毛　勲（1998）新版　朱の考古学. P.296, 雄山閣.

・加納　隆（1988）金属鉱床. 日本の地質『中部地方Ⅱ』
編集委員会編「日本の地質5　中部地方Ⅱ」, P.219、
共立出版株式会社.

・日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック　第二版. P.1289,
技報堂出版.

・岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元.
日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,
P.38－39

・降幡順子・沢田正昭（1997）酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究.
日本文化財科学会第14回大会研究要旨集, P.76－77

V 結 語

1．北蟻越遺跡

北蟻越遺跡（第１次）調査では、古墳時代前期の竪穴住居１棟（ＳＨ４）、古墳時代中期の竪穴住居３棟（ＳＨ８・ＳＨ12・ＳＨ18)、時期不明の掘立柱建物１棟（ＳＢ１)、及び多数の土坑を確認した。

ＳＨ４からは弥生時代中期の壺と伴にＳ字状口縁台付甕のＢ類が出土しており、４世紀前半の可能性が考えられる。ＳＨ８からは小型丸底壺等が、ＳＨ18からは小型平底壺や高杯、壺などが出土している。共に山城Ⅲ式に収まるものであり、５世紀前葉のものと考えられる。ＳＨ８とＳＨ18の埋土からは多量の炭や炭化材、焼土が検出された。しかも、出土土器も完形に近い物が多く見られることから、この２棟は焼失家屋であろう。また、この２棟は同時期の竪穴住居であり、８ｍ程の距離にあることから、類焼した可能性もある。両竪穴住居からの出土遺物は、焼失時に放置された一括品と考えられ、重要な資料である。

一方、竪穴住居４棟とも竈は確認されなかった。この北勢地域では、５世紀中葉から後葉頃に炉から竈に移行する時期だとされている[①]が、古墳時代中期のものと考えられる竪穴住居３棟ＳＨ８・ＳＨ18・ＳＨ12は、竈が出現する直前に近い時期の住居と考えられる。当遺跡の北東700ｍには津賀平遺跡が所在しており、1989年の第一次調査では古墳時代中期の集落跡が確認されている[②]。

このほか僅かではあるが、縄文時代や弥生時代の遺構遺物も確認され、周辺にその時代の遺跡の存在も考えられる。

本遺跡の出土遺物の全体的な傾向として、古墳時代中期のこの地域における一般的な甕であるＳ字状口縁台付甕は少数であり、くの字型口縁で丸底のいわゆる布留式系の特徴を持つ甕などが多い。このような出土遺物の傾向は、当地域としてはやや特異なあり方であり、近畿地方の影響が考えられる。このことを考える上で示唆的なことは、津賀２号墳から出土した大陸系の影響を呈した須恵器の存在である。鈴鹿川流域では、こうした大陸系の影響を呈した遺物が、少数ではあるが、複数の遺跡で確認されている。こうした遺物の存在は、物だけの移動なのか、人も移動したのか、いずれとも特定できないが、少なくとも古墳時代中期頃、当地域において西方からの影響をうかがい知ることができる。

今回の調査では、古墳時代前期から中期の集落の一端を確認することができた。本調査地は、台地の東端に位置しており、集落はさらに南北に広がるものと思われる。また、Ａ地区の西側に位置するＢ地区では、すでに削平を受けており、遺構の存在は確認できなかった。そのため、この集落が西側に広がるかどうかは不明である。

（城　吉基）

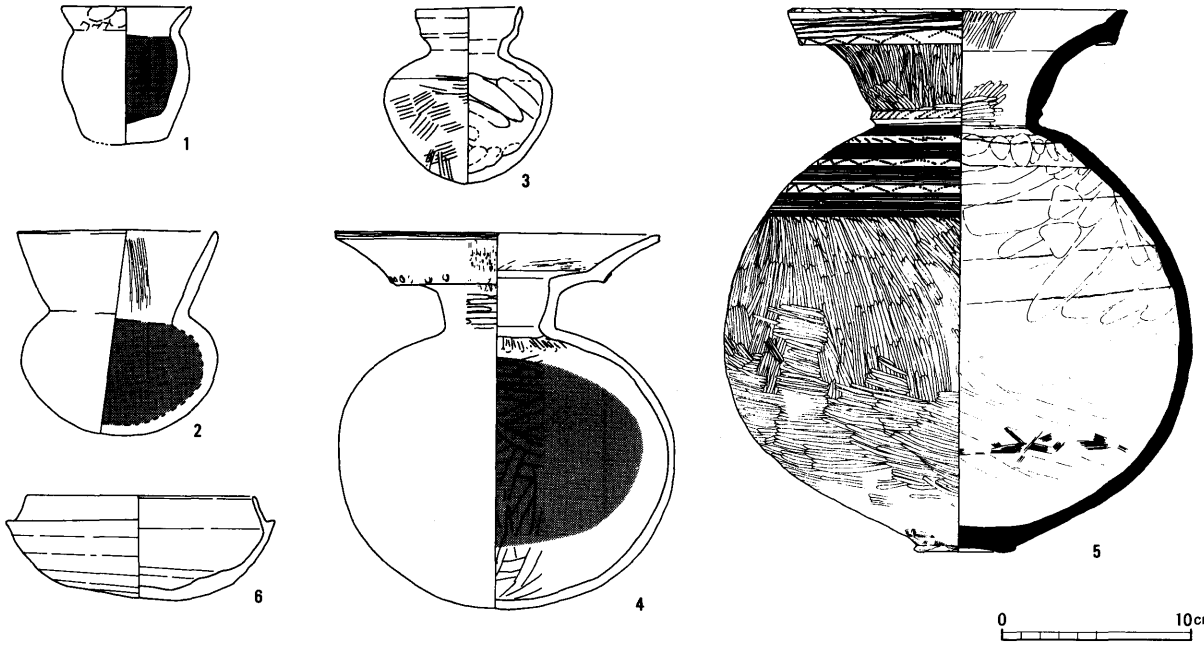
2．津賀２号墳

津賀２号墳は、南北14ｍ×東西12ｍのやや長方形を呈する方墳であることが確認された。軸方向はほぼ真北であった。石室は横穴式石室で、南に開口している。周溝は墳丘の北東部で明らかに途切れていた。なぜ陸橋状の部分をもっていたのかは不明であるが、墳頂部での祭祀に伴う通路を確保していたものであろうか。

古墳の築造時期は、出土した遺物より６世紀末から７世紀初頭と考えられる。また、石室より出土した須恵器蓋が三足壺に用いられる蓋に類似することから、被葬者についても渡来系氏族との関わりが推測される[③]。三足壺については、その出土地が交通の要衝であることや、鉄生産との関連などが指摘されている[④]。津賀２号墳についても、畿内と伊勢や東海を結ぶ交通の要衝に位置することや、石室内から供献鉄滓が出土していることなどが一致する。また御池古墳のほか、四日市市内では大塚古墳で有蓋椀型杯が[⑤]、大日山古墳では器台が出土[⑥]するなど、大陸系の影響を受けた須恵器が見られる。

今回の成果は、鈴鹿から四日市にかけての地域が、渡来人や大陸と深く関わりを持っていたことを改めて想定させる資料であると言える。

（新名　強）



1柴崎遺跡　2斗西遺跡　3中沢遺跡
4象鼻山1号墳　5雪野山古墳　6谷山古墳

2～4・6は各報告書のものを再トレース
5は報告書のものを転載
トーン部分は赤色顔料付着・貯蔵部分

第21図　赤色顔料貯蔵土器一覧（1：4）

3．古墳時代の赤色顔料貯蔵土器について

これまで三重県内で赤色顔料が貯蔵された状態で出土したのは、亀山市柴崎遺跡[7]と同市谷山古墳の2例のみである。柴崎遺跡出土の壺は竪穴住居内から出土している。器高7.4㎝・直径6.9㎝と小型のもので、つくりは粗雑で歪みが大きい。外面には指オサエ痕や工具によるナデ痕がみられるなど調整も粗い。多少の散逸はあるものの、現在中には36.63ｇのベンガラが残存していた。この竪穴住居からは短脚の土師器高杯やＳ字状口縁台付甕のＤ2類[8]などが出土しているが、須恵器は出土していない。おそらく山城Ⅳ式に収まるものと考えられ、5世紀中葉の年代が与えられる。谷山古墳のものは、第二主体部の棺外に副葬された須恵器杯身に赤色顔料が充填されていたものである。

三重県近隣では、岐阜県象鼻山1号墳[9]や滋賀県雪野山古墳[10]、同県斉頼塚古墳[11]でも赤色顔料を貯蔵したと思われる土器が出土している。象鼻山1号墳では墓坑内より水銀朱入りの壺が出土している。丸底の二重口縁壺で最大径は17.6㎝とやや大型のものである。雪野山古墳のものも石室内より出土しており、器高29.0㎝・最大径29.6㎝と大型の壺で、内容は水銀朱であった。これらは棺内に水銀朱を散布した後に、残量を壺に入れたまま棺内の南端に置かれたものと考えられている。また、時期は下るものの、斉頼塚古墳では石室内にベンガラが散乱しており、副葬された須恵器杯の内面に充填されていたもの考えられている。

一方集落内から出土したものは、滋賀県能登川町の斗西遺跡[11]や中沢遺跡[13]で確認されている。ともに竪穴住居内より出土したもので、小型の壺の中にベンガラが残っていた。斗西遺跡のものは4世紀後葉、中沢遺跡のものは6世紀後葉の時期が与えられている。

このほかにも、全国的にみれば古墳や集落内から赤色顔料が貯蔵されて見つかる例は多い[14]。古墳から出土するものについては、古墳時代前期では象鼻山1号墳や雪野山古墳のように埋葬部に赤色顔料を散布した後に壺を副葬したものが多く、大きめの壺に納められているようである。古墳時代後期になると赤色顔料自身の供献が目的と考えられ、須恵器の杯などに赤色顔料が充填されている。一方、集落で発見される赤色顔料貯蔵土器については、およそ用途が土器や木器などに塗布するためと考えられ、ほと

んどが小型の壺である[15]。

以上のように、赤色顔料を貯蔵する土器は、当然ながらその用途や時代によって変わるものである。北蟻越遺跡で出土したものは、他の集落出土のものとは様相を異にしているが、出土状況より竪穴住居ＳＨ18で貯蔵されていたことは間違いない。５kgを超える赤色顔料が残されていたことを考えると、他の集落出土のもののように塗布作業などに用いられたものではなく、貯蔵が目的であったと考えられる。北蟻越遺跡の資料は、集落内においても塗布作業に用いられるものとは別に、大型の壺によって赤色顔料が貯蔵されていたことを示すものである。

（新名　強）

〔註〕

① 山田猛ほか『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994

②「津賀平遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財年報Ⅱ』鈴鹿市教育委員会、1995

③ 嶋田光一「須恵器有蓋三足壺考」『古文化談叢　第30集(中)』1993、九州古文化研究会

④ 前掲③

⑤『四日市市史』四日市市、1961

⑥ 前掲⑤

⑦ 柴崎遺跡については、赤色顔料入り壺とともに共伴遺物を改めて実見した。
（「柴崎遺跡」『三重県埋蔵文化財年報７』三重県教育委員会、1977）

⑧ 山田分類による。前掲①

⑨ 宇野隆夫ほか『象鼻山１号古墳　－第２次発掘調査の成果－』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1998

⑩ 都出比呂志ほか『雪野山古墳の研究　報告編』八日市市教育委員会、1996

⑪ 林博道ほか『斉頼塚古墳』マキノ遺跡群調査団・マキノ町教育委員会、1998

⑫「斗西遺跡(第７次)」『能登川町埋蔵文化財報告書　第39集』能登川町教育委員会、1996

⑬「中沢遺跡(第10・11次)」『能登川町埋蔵文化財報告書　第34集』能登川町教育委員会、1994

⑭ 市毛勲「第五章　辰砂の貢納と分配」『新版　朱の考古学』雄山閣出版、1998

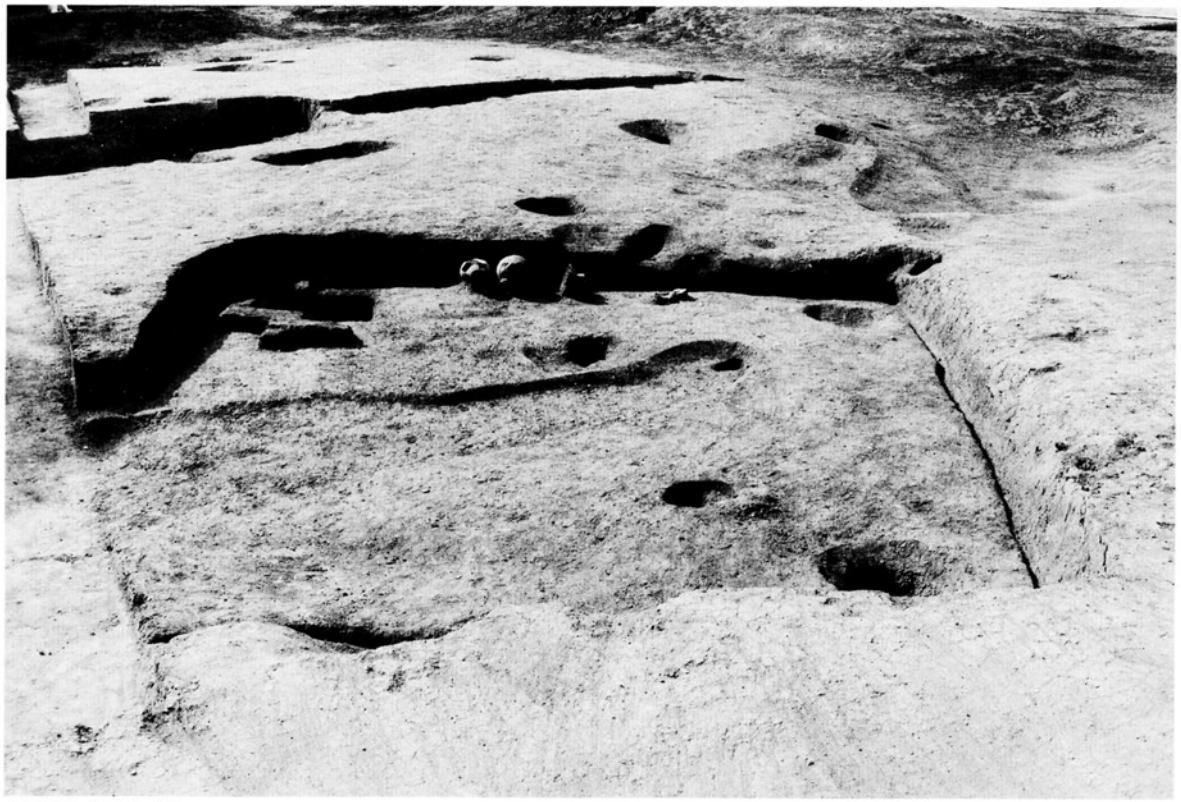
⑮ 前掲⑭

図版１

北蟻越遺跡・津賀２号墳全景（北西から）

北蟻越遺跡・津賀２号墳全景（北西から）

図版２



ＳＨ18（東から）

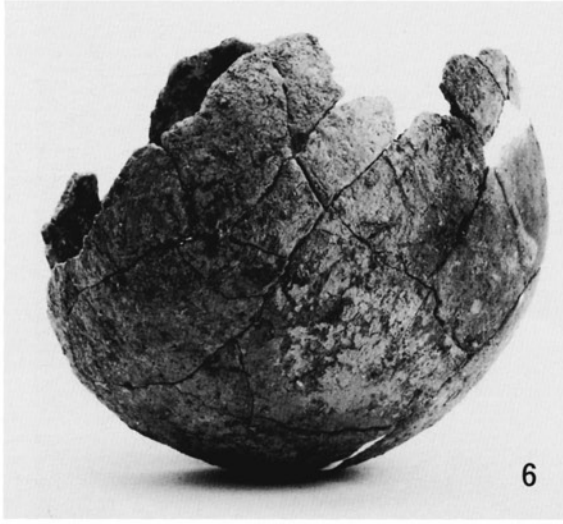
ＳＨ８（西から）

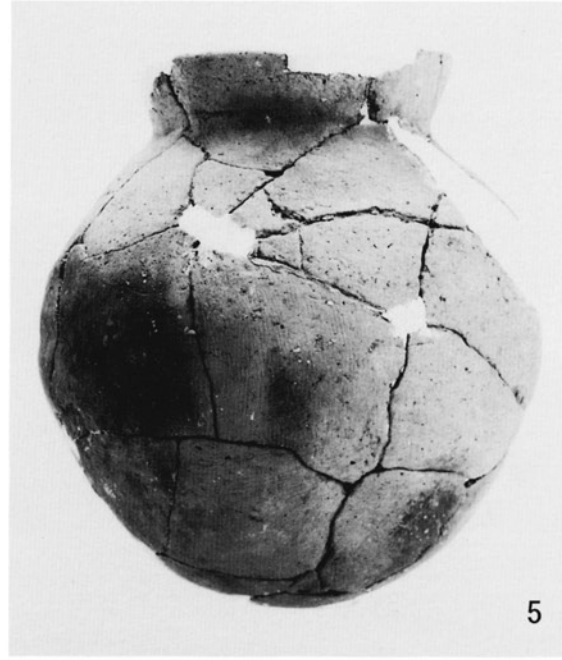
図版３

ＳＨ４（北から）

ＳＨ12（東から）

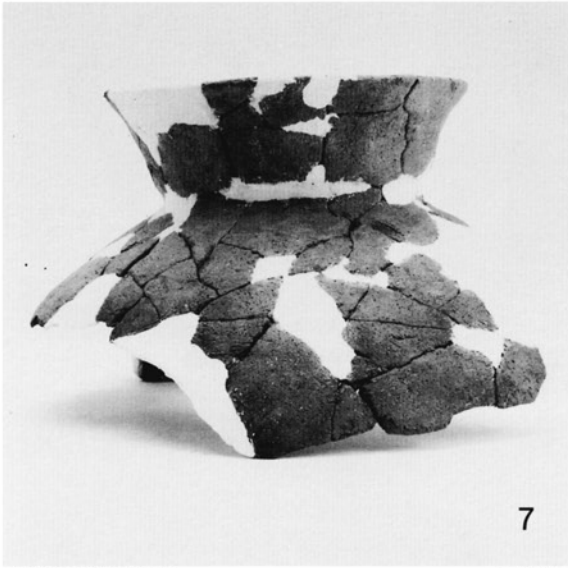
図版４





ＳＨ18（出土遺物）

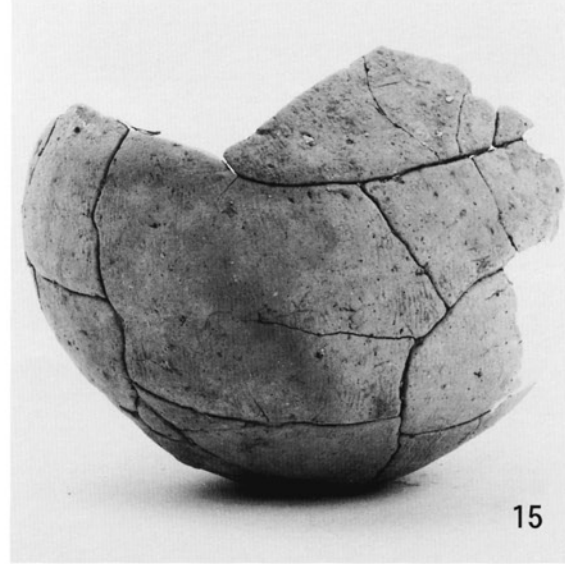
図版５



赤色顔料貯蔵壷　上半部

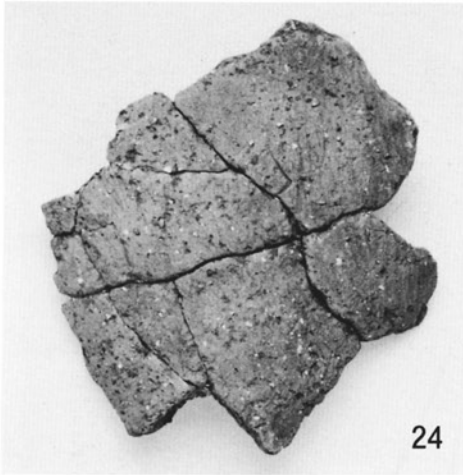
下半部

鉄製品



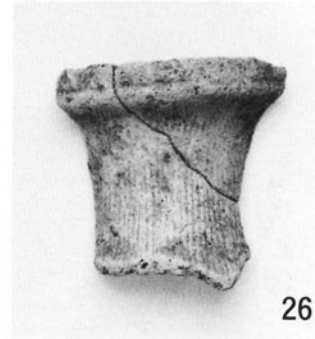
ＳＨ18　出土遺物（８～19）

図版 6

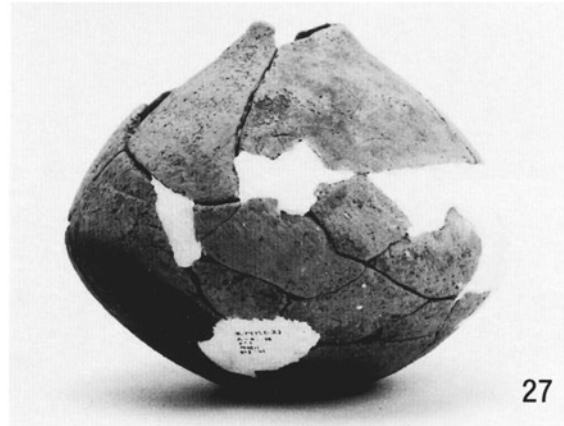


ＳＫ10出土縄文土器

ＳＫ10出土縄文土器

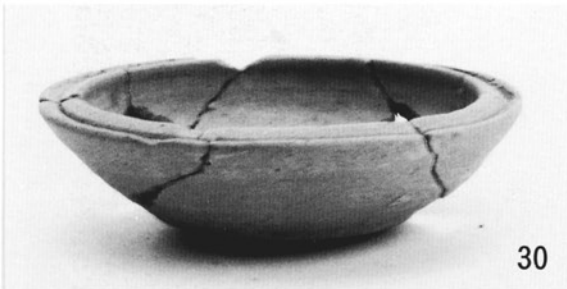


Ｐｉｔ１出土遺物

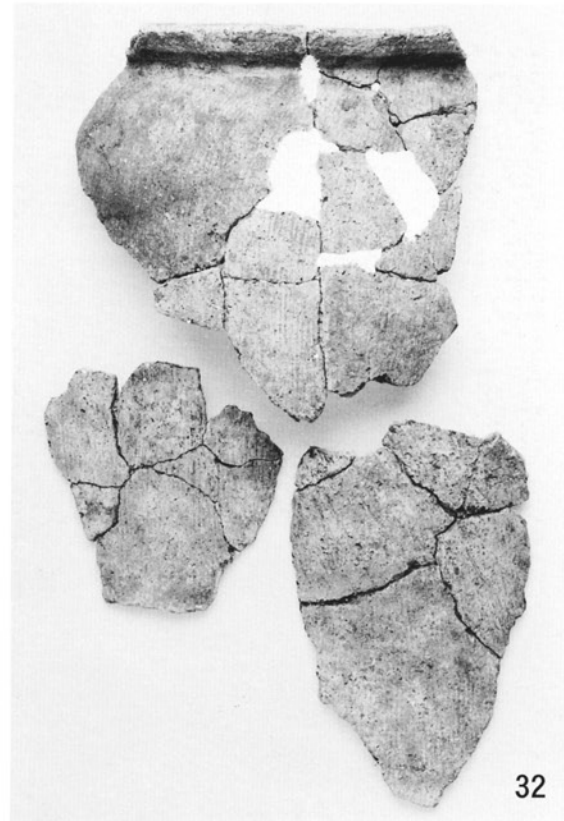


Ｐｉｔ２出土遺物

ＳＫ12出土遺物



ＳＫ６出土遺物（30・31）



包含層出土遺物

図版 7

津賀２号墳（北から）

津賀２号墳（北西から）

図版８

津賀２号墳石室（南から）

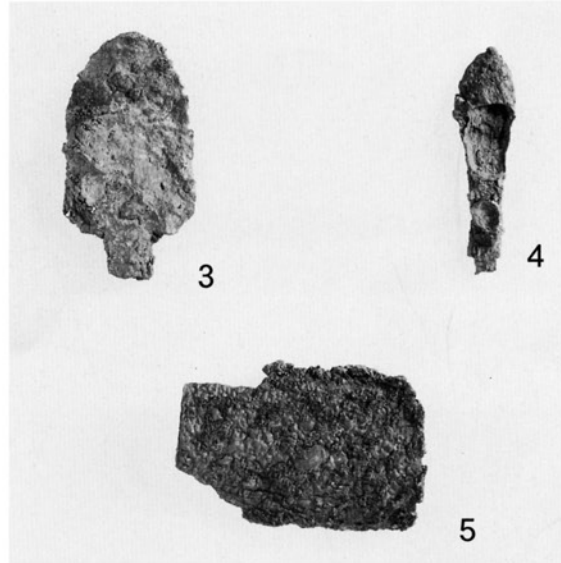
津賀２号墳石室（東から）

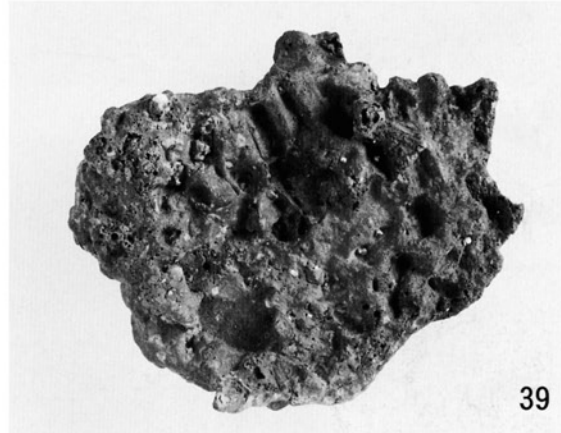
遺物出土状況（北から）

津賀２号墳石室（北から）

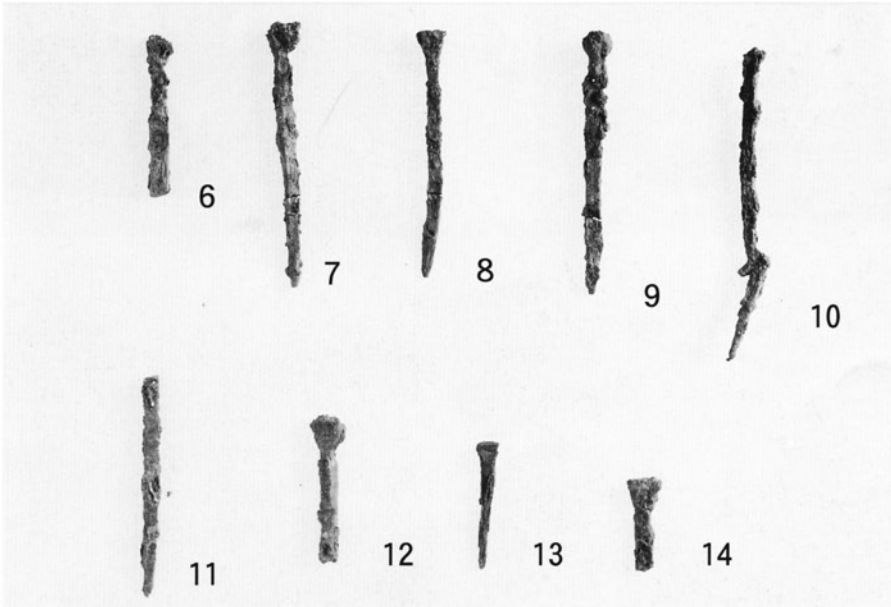
津賀２号墳調査後（北西から）

図版 9





供献鉄滓



鉄釘

石室内出土遺物

図版10

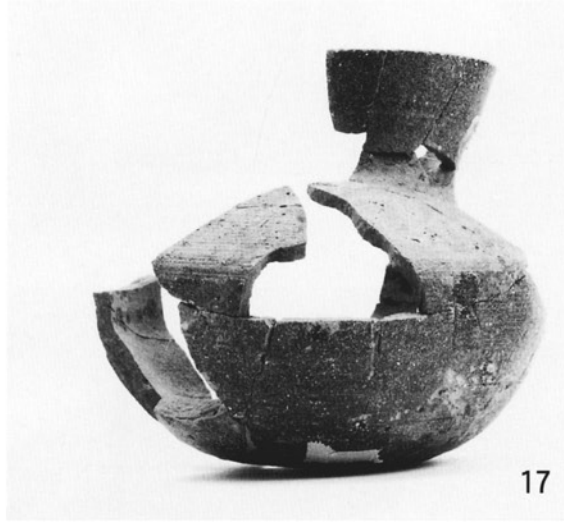
20

15

21

26

29


17

報告書抄録

ふりがな	きたありこしいせきだい１じ・つが２ごうふん
書名	北蟻越遺跡（第１次）・津賀２号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	205
著者名	城　吉基・新名　強
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL　0596（52）1732
発行年月日	2000年３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積m²	調査原因
きたありこしいせき 北蟻越遺跡 （第１次）	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 つがちょうみなみやま 津賀町南山	24207	521	34度 52分 53秒	136度 30分 49秒	1998. 6.17 ～ 1998.10.16	2,750m²	平成10年度一般地方道辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業に伴う事前調査
つがごうふん 津賀２号墳	同　上	24207	420	同上	同上	同上	150m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北蟻越遺跡（第１次）	集落跡	縄文時代	土坑	深鉢	
		弥生時代	ピット	壺	
		古墳時代	竪穴住居　４棟	土師器高杯・壺・小型平底壺	焼失家屋２棟 ＳＨ18より赤色顔料（ベンガラ）入りの壺が出土。
		不明	掘立柱建物１棟		
津賀２号墳	古墳	古墳時代	方墳 周溝 横穴式石室	須恵器杯蓋・杯身・高杯・平瓶、鉄釘、鉄鏃、馬具、供献鉄滓	方墳。周溝が巡るが、北東部で途切れ陸橋状の部分をもつ。横穴式石室で、石材は盗掘のため抜き取られる。鉄釘が多く出土。

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告205

北蟻越遺跡（第1次）
津賀2号墳

2000年3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　（有）第一プリント社